

第5章 カリキュラム・マネジメント

1 探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け
 「農業と環境」「総合実習」「農業情報処理」「家庭総合」「課題研究」「作物」「畜産」「草花」「果樹」「食品製造」「測量」「造園技術」「造園計画」「ファッション造形」「食文化」「地域創生論（令和3年度学校設定科目）」「社会起業家実践（令和4年度学校設定科目）」等の科目において探究的活動の主体を図る。また各学科の相互補完となるような授業展開をすることで、教科・科目横断的な学習の実践へと進化させる。

2 各科目における学習を相互に関連させ教科等横断的な学習とする取組について
 (1) 取組の概要

1年次農業科目「農業と環境」「総合実習」をベースに、各学科の専門科目を通じてプロジェクト学習法やPDCA評価サイクルの手法について基礎的な学習を行い、3年次である今年度も、農業科目「課題研究」、家庭科目「家庭総合」等において地域の課題等を題材とした探究的な学びにつなげ、継続的なプロジェクト研究活動を実施している。また、課題解決に向けた資質・能力の向上、プレゼンテーション能力の向上のため、「農業情報処理」で学んだ技術を活用してデータ等の分析を行い、本事業3年目の最終成果報告である成果研究発表会（12/6）にて発表することで、学びのアウトプットを通じた深い学びの実践を試みている。

(2) 学校設定科目「地域創生論」の取組について

今年度も、学校設定科目「地域創生論（2単位）」を社会に開かれた教育課程の実践として、かつ教科等横断的な学習の中心として位置づけ、2年生全学科を対象に開講した。年間を通じて9名の講師による講義・講演を実施した。その中で見出した地域課題について、各学科の専門科目と連動させ地域を題材としたより探究的・課題解決的な学習活動ができる体制づくりを推進した。

【令和4年度 地域創生論 外部講師招聘による授業 年間実績】

No	実施時期	所属・役職 講師名	受講生徒
1	5月25日	第1講 秋田大学教育文化学部地域文化学科 准教授 益満 環	選31名/他87名
2	6月8日	第2講 秋田県林業研究研修センター 専門員 菅原冬樹	選31名/他92名
3	6月22日	第3講 秋田県観光文化スポーツ部観光振興課 主事 柴田雄登	選31名
4	6月28日	第4講 秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科 准教授 酒井 徹	選31名/他19名
5	8月31日	第5講 加藤建設株式会社 代表取締役社長 村上仁志	選31名/他106名
6	9月28日	第6講 国際教養大学グローバルスタディズ領域 准教授 名取洋司	選31名/他12名
7	10月12日	第7講 桃山学院大学ビジネスデザイン学部長 教授 菊地昌弥	選31名/他30名
8	11月2日	第8講 農業法人安田農園 代表 安田淳一	選31名/他118名
9	12月14日	第9講 あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課 副主幹 青山真紀子	選31名

令和4年度「地域創生論」講師一覧（受講の様子）



第1講 益満 環 氏



第2講 菅原冬樹 氏



第3講 柴田雄登



第4講 酒井 徹 氏



第5講 村上仁志 氏



第6講 名取洋司 氏



第7講 菊地昌弥 氏



第8講 安田淳一 氏



第9講 青山真紀子 氏

設置科目の目標：地域の実態を理解するとともに、地域課題は何か、課題解決のための政策はどのようなものかを的確に理解し、他者に説明できることを到達目標とする。

実施月日：B週水曜日5～6時間目（年間10講義程度を実施予定）

使用教材（1）ジャパUNCHチャレンジプロジェクト『地方起業の教科書』（あさ出版）

（2）その他（講師が配付するレジュメ等）

(3) 学校設定科目「社会起業家実践」の取組について

今年度から、学校設定科目「社会起業家実践（2単位）」を3年生全学科対象の選択科目として開講した。環境問題や地域再生をはじめ、社会的課題を解決するための手段のひとつとして、ソーシャルビジネスの考え方や手法について学習する科目であり、2年次に実施した「地域創生論」にて学んだ地域課題を解決する方策を自ら考え、その考えをプレゼンできる能力を養うことを目標として実施した。

【令和4年度 社会起業家実践 外部講師招聘による授業 年間実績】

No	実施時期	所属・役職 講師名	受講生徒
1	6月10日	ビジネスプランセミナー①日本政策金融公庫東北創業支援センター 本田正人	選 31名
2	9月2日	ビジネスプランセミナー②日本政策金融公庫東北創業支援センター 本田正人	選 31名
3	9月22日	ビジネスプランセミナー③日本政策金融公庫東北創業支援センター 本田正人	選 31名
4	10月28日	地域活性化セミナー あきた未来創造部地域づくり推進課主任 柿崎亨介他	選 31名



講師の本田正人 氏



生徒の思考を見守る先生方



講師に質問する生徒



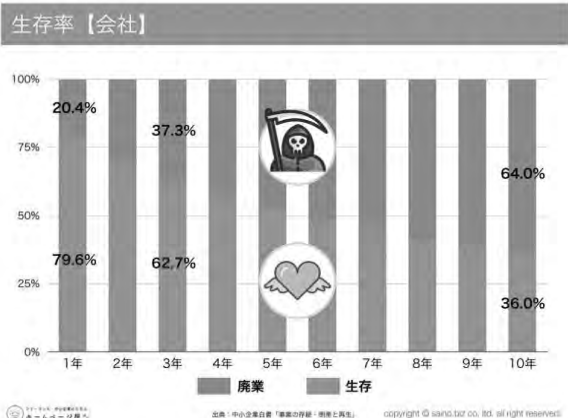
プランニングする生徒たち



個別指導の様子①



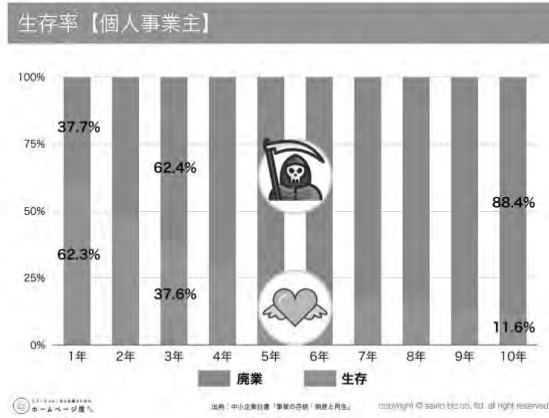
個別指導の様子②



© 株式会社 社会起業家実践
ホームページ

出典：中小企業庁「事業の存続・廃業と再生」

copyright © saip.biz co., ltd. all right reserved.



© 株式会社 社会起業家実践
ホームページ

出典：中小企業庁「事業の存続・廃業と再生」

copyright © saip.biz co., ltd. all right reserved.

3 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制について

学校の教育目標ならびに本事業の到達目標達成のために、学校設定科目である「地域創生論」ならびに「社会起業家実践」を核とした教育課程を教科・科目横断的な視点で5学科が連動するかたちで課題研究を深化させていく。そのためにコンソーシアムを引き続き構築し、その地域連携の強化を図るとともに、校内における研究推進委員会を充実させ、評価の改善を図る。

昨年度の目標が「地域課題発見と解決」であり、それを踏まえ今年度は、学校設定科目「社会起業家実践」や「課題研究」など様々な研修や事業を通じて、地域の諸課題に対する解決策を盛り込んだ「地域創造モデル」をプランニングし、地域に提言できることを目標とし研究開発を推進している。コンソーシアムに属する機関がそれぞれの専門性を生かしながら、生徒に対して課題研究等を進める際のフィールドワークの場を提供し、活動の支援を行っている。具体的な実施機関・団体組織として、市町村や大学等の高等教育機関はもとより、林業研究研修センター等の各専門機関や、関連産業、農家・農業法人等と協働しながら事業を展開した。今後もコンソーシアムと協働し、学科間を横断したプロジェクト学習を展開するための研究開発を継続的に進めていきたい。今後も、本事業を契機としたうえで、さらなるカリキュラム開発を加速度的に進め、地域産業を担う人材の育成に努めていきたい。

4 学校全体の研究開発体制について

(1) 研究開発推進委員会の設置

学校長を統括とし、教頭2名を統括補佐ならびに渉外、事務長を経理統括、農場長、全5学科主任、教務主任、進路指導主事、農業クラブ顧問を含む20名で構成される委員会（研究開発担当とカリキュラム開発担当に分類）を設置し、校内経営企画会議、職員会議、農業部会等の諸会議とリンクさせ研究開発が円滑に推進されるよう組織体制を構築している。

プロフェッショナル型の趣旨に応じた取組については、地域の産業界等との連携・協働による実践的な職業教育を推進し、PDCAサイクルによるプロジェクト学習の手法を学習することで研究開発を推進し、様々な研修や事業を通じて、地域課題の発見（抽出）とその解決のための方向性や手段を各自が見いだすことで、創造性や思考力を養っている。次年度もさらにこれらの改善策や地域の在るべき姿を外部へ提言し、実践力を身に付けていくこととする。

(2) 研究開発推進委員会開催日時と協議内容

月日	曜日	協議内容
6月27日	月	令和4年度（研究開発3年次）の実施計画の概要説明と共通理解
9月30日	月	令和5年度学校設定科目の設置案件と運用方法の検討・協議
2月10日	金	3年間の成果と課題、今後の自走に向けた取組と協働体制の検討

学校設定科目設置届

学校番号	1 5
学 校 名	秋田県立金足農業高等学校
校 長 名	松田 聡

令和4年度教育課程に次の学校設定科目を設置いたします。

設置科目の名称	「地域創生論」		
教 科 名	農業		
設置する理由	時代に対応すべく、社会に開かれた教育課程を実践するため。また、持続可能な地域社会ならびに地域産業を支える高度な職業人や、地域に定住する人材を育成するため。		
設置科目の目標	地域の実態を理解するとともに、地域課題は何か、課題解決のための政策はどのようなものかを的確に理解し、他者に説明できることを到達目標とする。		
設置科目の内容	<p>行政又は企業等の実務経験者を外部講師として招聘し、地域の実情や課題、将来の地域の展望等について講義を実施し、生徒一人一人の地域課題認識を明確にすることを目的とする。オムニバス授業形式による授業とし、講義時間は60分程度、質疑による理解の醸成を図る時間を30分程度とし、講義への理解を深める。最終の授業形式は、外部講師、本校教員、そして受講生徒によるシンポジウムを実施し理解を深める。</p> <p>なお本講座は地域への公開講座として位置付ける。そのため、講座のパンフレットやシラバスを作成し、地域へ配付する。</p>		
実施学科名	生物資源科・環境土木科 食品流通科・造園緑地科 生活科学科（全5学科）	実施学年	2年（選択科目群）
単 位 数	2単位	実施予定時数	70時間
使 用 教 材	<p>①中川直洋『地方起業の教科書』あさ出版2020年(副教材) ②中嶋信『集落再生と日本の未来』自治体研究社2010年(副教材) ③西川潤『人間のための経済学』岩波書店2000年(副教材) ④その他（講師が持参するレジユメをその都度配付する）</p>		

令和4年度 科目「地域創生論」年間学習指導計画

秋田県立金足農業高等学校

学期	月	単 元	配当 時間	学 習 内 容	評価の観点及び留意事項
I	4	1 ガイダンス	2 4	ガイダンス：グローバルとローカル 第1講「地域創生論のねらいと諸論説」(仮)	・グローバル化する日本の地域社会の実情について理解できる。
	5	2 地域創生に関する講義 (第1～第6講)	6	・大学教授等による解説 第2講～第4講 「地方自治体の地方版総合戦略について」(仮)	・地域創生の必要性について理解し、他者に説明できる。 ・地方自治における地方総合戦略の意義と、現政策の実行状況を踏まえた課題について理解できる。
	6	※講義のない週は、関連の先行研究のレビューを行う)	6	・県、市町村行政担当者による講義 第5講～第6講義 「地域経済の好循環」(仮)	・地域経済の循環システム(全体像)を把握し、地域経済の循環構造を捉えることができる。
	7		6 ----- 2 4	・大学教授等による講義	
II	8	2 地域創生に関する講義 (第7～第11講)	4	第7講～第11講 「地域産業を活かした地域産業の活性化」(仮)	・グローバル化する日本の現実を捉え、21世紀のグローバル社会を、地域の産業という視点から展望することができる。
	9	※講義のない週は、関連の先行研究のレビューを行う)	8	・農業法人関係者 ・J A、全農関係者 ・土木建設業関係者 ・食品産業関係者 ・造園業関係者 ・家政、生活科学関係者 等々による講義	・グローバルな動きの中で形成されているローカル(地域政策等)の課題や問題を自ら探ることができる。
	10		8		
	11		8		
	12	3 パネルディスカッション (第12講)	6 ----- 3 4	第12講～15講 「地域創生の実現に向けて」外部講師、生徒、地域住民によるパネルディスカッション(公開講座)	・地方や地域が健全で、安全・安心な暮らしの場として発展していくための地域再生・まちづくりの在り方を理解している。
III	1	4 事例レポートの輪読によるグループディスカッション	4	(1) 地域活性化に関する事例レポート等の輪読によるディスカッション	・恒常的に地域活性化に関する新聞や雑誌記事、ニュースなどを読み、地域政策に関する自分なりの見解を持つ習慣を身に付けている。
	2		6	(2) 地域経済分析システム(RESAS)やセンサスによるデータ分析	・地域経済分析システム(RESAS)を利用し、データに基づく地域活性化について、提言することができる。
	3	5 総括 (住民が地域に求めるもの)	2 ----- 1 2	(3) まとめと次年度への展開と、成績評価レポートの提出	

学校設定科目設置届

学校番号	1 5
学 校 名	秋田県立金足農業高等学校
校 長 名	松田 聡

令和4年度教育課程に次の学校設定科目を設置いたします。

設置科目の名称	「社会起業家実践」		
教 科 名	農業		
設置する理由	時代に対応すべく、社会に開かれた教育課程を実践するため。また、持続可能な地域社会ならびに地域産業を支える高度な職業人や、地域に定住する人材を育成するため。		
設置科目の目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 社会起業家及び会社経営の仕組みを理解し、説明できる 2 新たな時代の価値創造の担い手としての起業を理解できる。 3 今後の起業や会社経営のあるべき姿をプレゼンできる。 		
設置科目の内容	<p>環境問題や地域再生をはじめ、社会的課題を解決するための手段のひとつとして、ソーシャルビジネス（社会起業家）の考え方や手法について学習する。その内容は、地域が抱える諸課題の解決を主眼とし、まちづくりや六次産業化などに取り組む社会起業家を招聘し具体的事例を学ぶ。また、地域貢献ビジネスの現場を視察するなど、多面的に学ぶ機会を提供する。これらの経験を踏まえ、受講者が具体的なビジネスモデル（プラン）を設計し、実際に県内の企業等へプレゼンテーションを行うことで、社会起業家としての資質、能力を身に付ける。</p>		
実施学科名	生物資源科・環境土木科 食品流通科・造園緑地科 生活科学科（全5学科）	実施学年	3年（選択科目群）
単 位 数	2単位	実施予定時数	62時間
使用教材	<ol style="list-style-type: none"> ①中川直洋『地方起業の教科書』あさ出版2020年（副教材） ②栗木契編著『ビジョナリーマーケティング』碩学舎2013（副教材） ③西川潤『人間のための経済学』岩波書店2000年（副教材） ④その他（講師が持参するレジユメをその都度配付する） 		

令和4年度 科目「社会起業家実践」年間学習指導計画

秋田県立金足農業高等学校

学期	月	単 元	配当 時間	学 習 内 容	評価の観点及び留意事項
I	4	1 ガイダンス	2	<ul style="list-style-type: none"> ・社会起業家実践の進め方の説明 ・社会起業家の定義、地域貢献ビジネスの意義と役割の概観 ・地域資源の有効活用のための農工商連携（六次産業化）の意義と効果、社会背景の変化について ・ゲストスピーカー招聘による社会起業の先進事例に関する講演 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会変革（農業関連産業の変革）の担い手として、社会の課題を、事業により解決するための意義を理解できる。 ・社会起業家の現状を理解し、地域課題の抽出や、解決のためのアイデアやビジネスプランを自ら考える思考力を養う。
	5	2 社会起業家の現状と課題	4		
	6	3 地域コミュニティにおける社会起業の事例	1 8		
	7		----- 2 4		
II	8	4 ビジネスプランの設計	2 0	<ul style="list-style-type: none"> (1) 高校生ビジネスプラングランプリへの応募（ビジネスプランシートの検討、作成、提出） (2) あきたビジネスプランコンテストへの応募（起業家交流フェス参加） ・社会起業家や、地域貢献ビジネス実践家等の訪問による具体的な事例の実態把握 ・グループごとに整理した内容についてのプレゼンテーション作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループでの対話を通じてビジネスプランを作成していく能力や、対話による思考力の深まりを体得する。 ・秋田県内の社会起業における先進事例の実態を把握できる。 ・社会起業家ビジネスの課題を整理し、主体的に学ぶ姿勢や、これら実社会との関連についてイメージを持つことができる。 ・グループでのプレゼン作成に取り組むことにより、プレゼン作成能力、情報収集と分析力を身に付けることができる。
	9				
	10	5 フィールドワーク及びゲストスピーカーの招聘	8		
	11				
	12	6 プレゼンテーションの作成	6 ----- 3 4		
III	1	7 事業プレゼンテーションのまとめと発表	4	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ別プレゼンテーション形式での発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループのプランをまとめ、プレゼンする表現力を培う。 ・一連の活動を通じて、社会起業家に必要な資質、能力を身に付けることができる。
	2				
	3		----- 4		

第6章 研究成果の検証・評価

1 目標設定シートによる進捗状況

目標設定における目標数値と3年間の達成状況、ならびに数値の変容は以下の通りである（目標設定シートから一部抜粋）。概ね、目標としていた数値を達成することができたと捉えている。本事業に参加した生徒の延べ人数でいえば、1年目が811名、2年目が1,631名、最終年度である今年度は2,392名と初年度に比べ約3倍の生徒数増加が見られている。最終年度にして、全校生徒が本事業の恩恵を享受し取り組むことができた。本事業の目的や主旨、将来像を全職員で認識し、生徒とともに共有し取り組んだことで、目標が達成できたと考えている。

成果目標 設定項目	R2実績値	R3実績値	R4実測値	最終目標値
地域の担い手として地域の抱える課題に関わり行動したい	70%	78%	86%	80%
自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会が増えた	63%	73%	79%	80%
将来、自分の住んでいる地域のために役立ちたい	68%	82%	91%	90%
地域に愛情を抱いており現在の生活に幸せや豊かさを感じる	79%	91%	98%	98%
地域の魅力を再発見し、地域(県内)に定住したい	66%	73%	81%	80%
就職希望者の中で県内就職を希望し、就職した生徒の割合	91%	88%	94%	90%
本事業を活用して研修等に参加した生徒の割合	74%	67%	100%	90%
将来、自分の住んでいる地域で働きたい	56%	73%	81%	81%

2 高校魅力化評価システム（1年次156名、2年次142名、3年次156名対象）

本事業採択の2020年より3年間、三菱UFJリサーチ&コンサルティングによる外部委託調査を実施した。この調査からは、高校と地域の学びの「いま」と「変化」を読み取ることができ、かつ継続的な調査により生徒の変容ならびに、本校の「強みと弱み」が明確に診断できるものである。

多くの項目で3年間の変容が見られており、本事業を通じて大きな成長が見られる結果となっている。地域に目を向けて、地域産業を知る、地域の魅力を知る。そして、地域の課題も見えてきた。そのようにしっかりと「社会と地域」を捉えることができるようになれば、またその視点も変わってくると考えている。

分野	領域	質問項目	割合	1年次との差	他地域との差
学習環境	主体性	地域に尊敬している・懂れている大人がいる	78%	+24p	+22p
学習活動	主体性	自主的に調べものや取材を行う	83%	+25p	+13p
学習環境	社会性	地域の人や課題にじかに触れる機会がある	85%	+17p	+28p
自己認識	主体性	目標を設定し確実に行動することができる。	83%	+16p	+20p
自己認識	社会性	地域の担い手として政策決定に関わりたい	69%	+24p	+35p
自己認識	社会性	私に関わる事で社会を変えられるかもしれない	74%	+42p	+18p
自己認識	社会性	地域の課題と世界での課題は関連している	85%	+27p	+12p
自己認識	社会性	地域文化や暮らしを自らの手で未来に伝えたい	80%	+30p	+20p
行動実績	主体性	授業で興味のある内容について自主的に調べた	78%	+41p	+15p
行動実績	探究性	授業でなぜそうなるかについて考え調べた	83%	+34p	+11p
総合認識	満足度	この学校に入学して良かった。	97%	+2p	+10p

3 金農 Value Rubric（ルーブリック）による評価とその分析

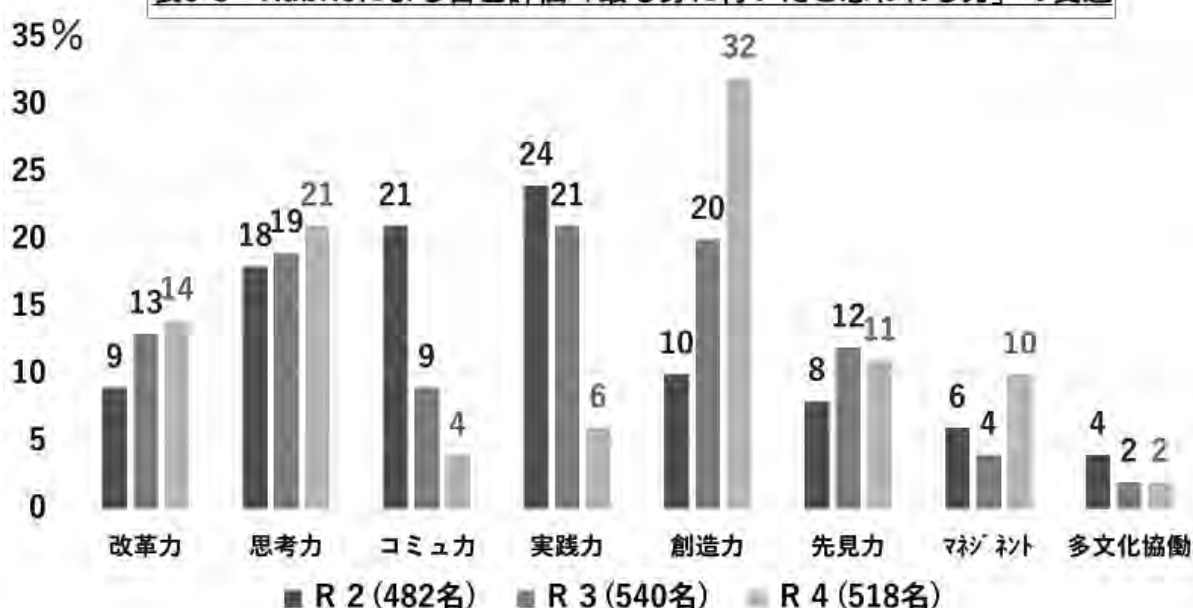
本事業にて身に付けさせたい8つの資質・能力（①改革する力、②思考力、③人間関係構築力、④実践力、⑤創造力・将来設計力、⑥先見力、⑦マネジメント力、⑧多文化協働力）について、評価基準（表6-1）を定め、ルーブリックによる自己評価を実施した。評価の尺度として、S（Capstone）5点、A（Milestone）4点、B（Milestone）3点、C（Benchmark）2点、D（Unachieved）1点とし、各資質・能力の合計平均値を算出し初年度と比較した結果、全ての項目で初年度を上回る結果となった（表6-2①②）。特に「改革力」や「創造力」が身に付いたと認識する生徒が増加したことは、この事業の根幹に関わる部分として注視していきたい。

表6-2①金農 Value Rubric による各資質・能力の平均値（全学科3年生・156名）

資質・能力	改革力	思考力	関係構築	実践力	創造力	先見力	マネジメント	文化協働
R2 平均値	2.9	3.3	3.8	3.0	3.1	3.2	3.2	2.9
R3 平均値	3.3	3.6	3.8	3.3	3.5	3.5	3.3	3.2
R4 平均値	3.5	3.7	4.3	3.9	3.7	3.7	3.8	3.7
増減	+0.6	+0.4	+0.5	+0.9	+0.6	+0.5	+0.6	+0.8

また、事業終了後に実施している振り返りシートから、「この3年間を通じてどの力が最も身に付いたか」という自己評価において、①創造力（32%）、②思考力（21%）、③改革力（14%）という結果であった（表6-3、アンケート総数518名）。学校設定科目「地域創生論」ならびに「社会起業家実践」といった未来志向的な学習内容に加え、本事業による現場見学や出前授業などによる地域学習を積み重ねることで、将来の地域を考える力や思考力、地域を変えたいと思うような気持ちに変化していく様子が見て取れる結果だと示唆される。

表6-3 Rubricによる自己評価「最も身に付いたと思われる力」の変遷



4 金農総幸福量GKH (Gross Kanano Happiness) 指標開発に向けて

本事業における生徒の変容を計るオリジナルの指標を考案し、主として心の豊かさや幸福感の尺度を測定する取組として、「金農総幸福量GKH (Gross Kanano Happiness)」を初年度から取り入れ、様々な角度からその指標を評価してきた。

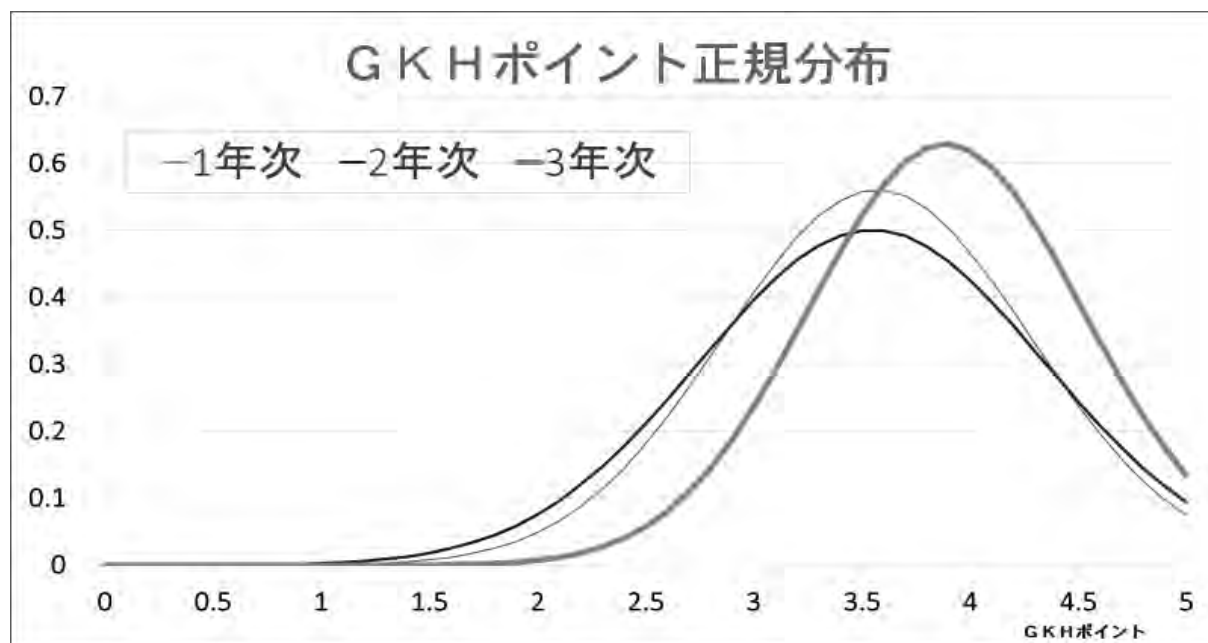
本指標は、「心理的な幸福」「自然環境」「健康・福祉・生活」「教育」「地域・産業・文化」「時間の使い方」「コミュニティの活力」「良い統治」「安心・安全」の9分野を、生活上の「生きがいの柱」とし、それぞれの分野から合計50項目の関連する質問を構成したもので(表6-4)、回答の尺度は①感じる(思う)5ポイント、②やや感じる(やや思う)3ポイント、③あまり感じない(あまり思わない)、1ポイント、④感じない(思わない)0ポイントとし、その合計の平均値をGKHとして算出し、初年度からの経年変化を見た(表6-5)。評価としては、3.5ポイント平均を「幸福感や豊かさを感じている基準」とした場合、全ての学科において幸福度が見られる結果となった。なお、経年変化では差異は見られなかった。

表6-5 GKH指標一覧(1年次172名、2年次160名、3年次156名より経年比較)

学科	生物資源科	環境土木科	食品流通科	造園緑地科	生活科学科	全学科平均
1年 Average	3.56	3.88	3.46	3.41	3.54	3.57
2年 Average	3.62	3.88	3.28	3.55	3.48	3.56
3年 Average	3.94	4.29	3.70	3.70	3.80	3.88
増減	+0.38	+0.41	+0.24	+0.29	+0.26	+0.31

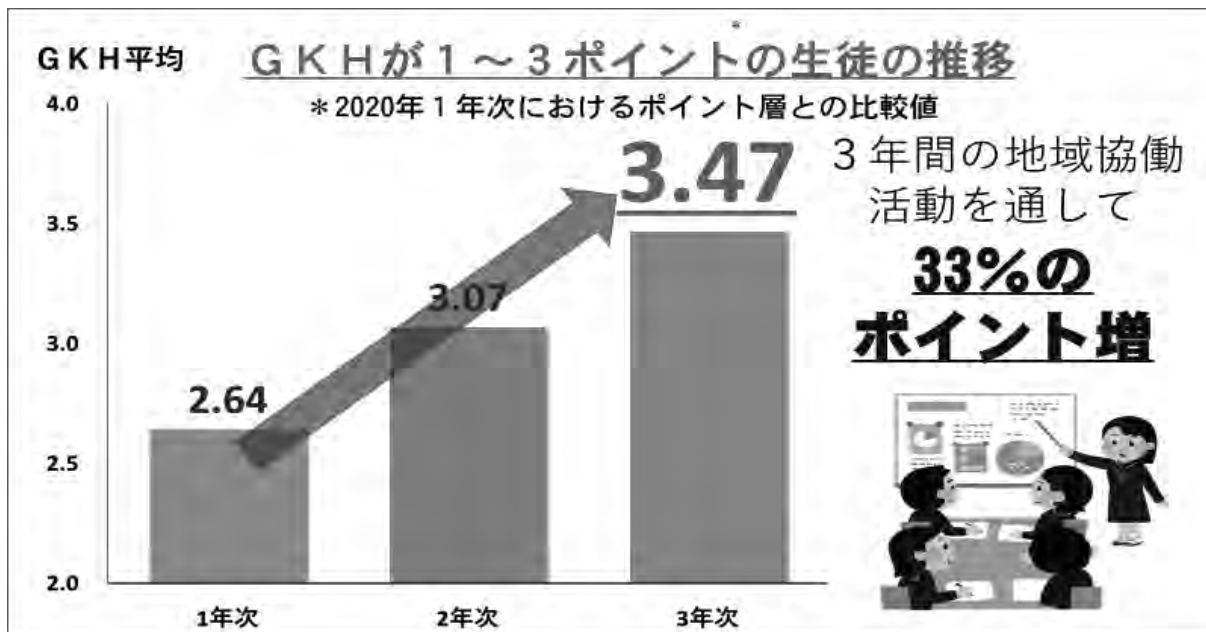
GKHのポイント評価について、正規分布のとおり2年次では個人と向き合う悩みなどの大切な時間もあり、1年次よりGKHポイントの散らばりが見られたが、見最終学年で、成長につなげる重要なプロセスの集大成として評価(平均3.9)できた結果となった。活動の中で協働的に友人と資質を高めあったことが見て取れる。

正規分布の分散値としては、前年比平均+0.34と上昇し、標準偏差-0.16と分布の散らばりが小さくなったことが明らかになった。



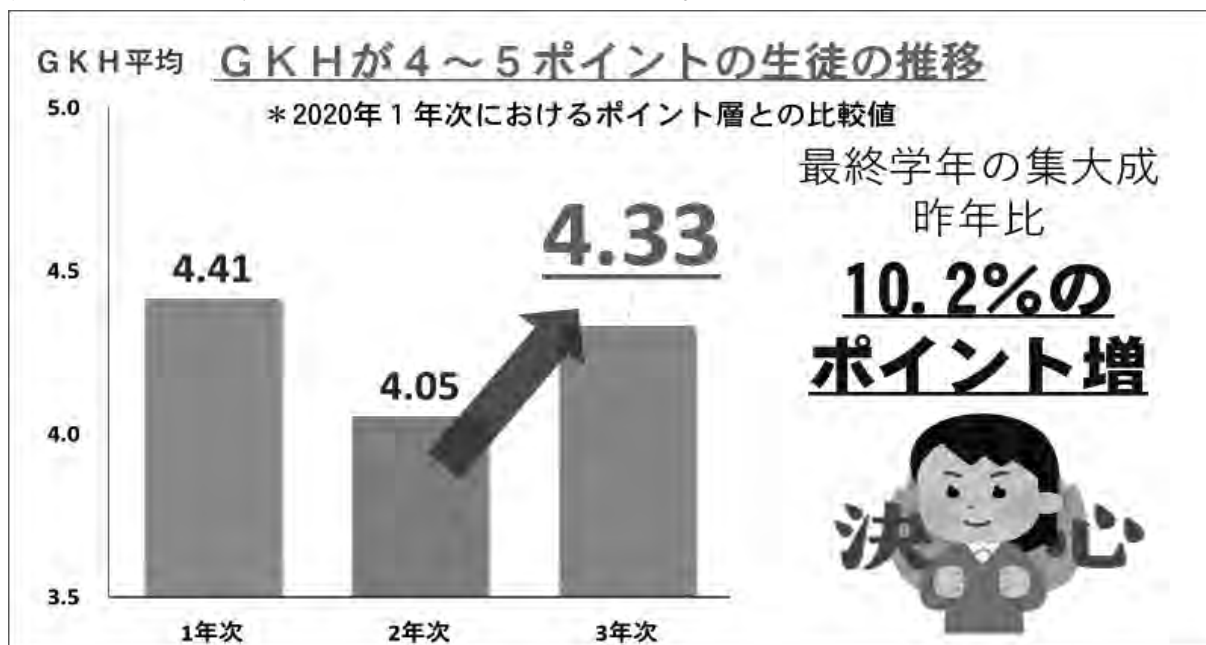
【1年次のGKHポイントの平均値が1～3ポイント層の変容について】

最終学年の3年間で+33%となった。地域協働の活動を通して、受動的学習から能動的学習ができたという自己評価として見て取れる。秋田の抱える問題は山積みではあるが、この秋田で生き抜こうとする姿勢は評価できる。金農での粘り強い体験を得て、卒業後社会で幸福を感じていくと推察できる。



【1年次のGKHポイントの平均値が4～5ポイント層の変容について】

前年比+10.2%となり、2年次で悩み苦しんだ時間を経たものの、最終学年で振り返り自己評価を高めたと示唆される。地域との関わり、人を通じた交流で心を揺さぶられた生徒が多かったと思われる。秋田県は高齢社会であるが、逆に一番に高齢社会を抜けられる県にもなり得る。GKHの視点から、他者との比較の幸福ではなく、自分のものさしでの幸福感や豊かさなど新しい価値観が高まり、地域との協働を大切に生き抜く覚悟ができたと推察できる。



5 定性評価 ー生徒が何を学び、何を感じ取ったかー（振り返りシートから抜粋）

【令和3年度学校設定科目受講生より】

- ・自分が定住したい秋田のことをよく知り、何が必要とされているのか、その中で自分は何ができるのかについて考えたい。
- ・秋田の課題が見つかったので、改善策を考えたい。秋田に住む女性のネットワークを構築し、コミュニティを形成したい。働きやすい秋田を創造したい。
- ・AI、人工知能等の情報化社会の進展により社会の利便性が向上する反面、人の価値や人の優しさや温かさといった心が失われそうな将来こそ人間関係が重要。
- ・失敗を恐れず挑戦したい。学ぶことは挑戦し続けることだと思う。少子高齢が進む秋田で自分が社会を変えられるのであれば挑戦したい。
- ・ずっと住んでいるから見えないものがある。幼い頃から親しんでいるから気づけない魅力がある。この授業を通じて改めて考えさせられた。
- ・小さな幸せを見つけながら生活することで、心の面からもポジティブな自分になっていきたい。
- ・その地域にしかない魅力を子どもの目線から見つつ、地域活性化と教育を一緒に実施していくことは今の日本に必要な事。
- ・20年後の日本や秋田がどうなって、何が必要とされているのかをしっかりと見極め、また第三者に聞いたりして自分にあっているのか、自分のやりたいことを考えながらしっかりと選択していきたい。
- ・秋田の定住したい地域の実情を知り「今何が必要とされているのか、その中で自分は何ができるのか、何になれるのか」というポイントを視野に入れ、この授業に臨みたいと同時に、今からできることを少しずつやっていきたい。
- ・島根大学の中村先生のお話でもあったように、教育の基本は学校を廃校にしないでいかに地域に残すか、地域と密接な関わりを持たせるかが重要。「どうせ秋田は何もない」ではなく、その何もないところに着目し、大切さを見いだす人もいる。
- ・地域のために柔軟な発想で行動をおこし、発信するという一連の行動を通じて革命を起こしたい
- ・価値観は人それぞれ違うので、それを幸せに感じるか否かは分からないけど、自分は地方のほうが幸せに生きるための環境が整っていると感じている。
- ・少子高齢が進んでいる秋田に外部の人が住みたいと思ってもらえるような商品を開発したい。また、愛や幸せいっぱい地域をつくるために、地域の人たちとのコミュニケーションや結を大切にしていきたい。
- ・若者の最先端である私たち高校生が、自由で新しい発想力や創造力が求められているということを知り、地域創生論を受ける意味を再確認することができた。
- ・秋田や地域にもまだまだ知らない魅力があり、それを知らないまま過ごすことで風化させるようなことは絶対あってはならない。そのためには、まずは地域への関心を高め、地域を知る。地域と密接な関わりを持つことで見える景色が変わってくる。
- ・課題がたくさんあるほうが地域の強みになると思う。秋田にはたくさん課題はあるが、その課題が明確であることで改善点が探りやすいとも言えるのではないかな。
- ・普段当たり前のようにある日常が自分次第では当たり前でなくなるという危機感を感じている。それだけ、少子高齢は危機的状況にあることを知った。

- ・大丈夫だよと背中を押してくれる人や友人、大人がいれば前を向いて進むことができる。これから先、自分を信じて失敗を恐れず前を向いていこうと思った。

【令和4年度学校設定科目受講生より】

- ・何よりも現状を理解することが大切だと理解した。いま何が課題で、どうやって解決すべきかをしっかり考える思考力が必要だと感じた。
- ・人口減少への危機感を自覚した。秋田県や自分の住んでいる地域を見る視点が大きく変わった。私たち高校生にできることは何かを考える契機となった。
- ・今まで秋田の将来がどうなるか考えたことがなかったが、自分の住んでいる秋田がなくなる。財政破綻の状況は避けたいので普段から意識していきたい。
- ・秋田の強気と弱みを知ることで、これから何を実践していけば秋田の将来を設計してゆけるのかを自分なりに考えることができた。
- ・秋田は今後どうしていくべきなのかを考え、自分はどうすれば秋田に貢献できるのかについてしっかり考えたい。自立という言葉が地域に当てはめた場合、課題も多いが、これからはそのように地域が自立していく時代になるのではないかと思う。
- ・今は利便性が良い時代で住みやすいと思っていたが、それは自分が良い部分だけを見ていただけで、視野を広げれば環境問題や資源の枯渇など、負の側面もかなりあることを知った。その中で自分は何ができて、どう時代に対応していくべきか真剣に考えるべきである。
- ・目標の実現のために努力することや、実現後もさらに良いものを求める向上心や実践力がこれから求められる時代ではないだろうか。
- ・解決すべき課題に直面したとき、その目的をしっかりと理解し、そのためにはどうするのかを考え、先を見抜くことができる大人になりたい。
- ・地域の強みを理解し、新たな価値を見つける力である先見性を身につけたい。

学校設定科目「地域創生論」(2年次)

外部講師によるオムニバス方式・公開講座(R3:10回・R4:9回)

秋田で生きる
Live in akita

A 地域を知る
地域の魅力と課題を再発見します！

B 地域課題の解決
あなたの未来を創造します！

C 地域を科学する
地域政策や経済学を学びます！

公開講座パンフレット(学校HPにて)

秋田大学教育文化学部
地域文化学科准教授 益満環

オルウィーヴ合同会社
代表取締役 竹下香織

島根大学大学院
准教授 中村怜詞

仙北市 齋藤農園
代表 齋藤瑠璃子

ふりがな	あきたけんりつかなあしのうぎょうこうとうがっこう	指定期間	2020～ 2022
学校名	秋田県立金足農業高等学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
現状を分析し、地域の課題を発見して、解決に向けて意欲的に取り組むことができる生徒の割合						単位：％
a	本事業対象生徒：	目標値	65	75	85	85（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：	実際値	72	77	81	81
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の学習活動」に係わる主な指標における成果目標						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
地域の担い手として、地域の抱える問題や課題に積極的に関わり、行動したい生徒の割合						単位：％
a	本事業対象生徒：	目標値	70	75	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：	実際値	70	78	86	86
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の行動実績」に係わる主な指標における成果目標						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会が増えた生徒の割合						単位：％
a	本事業対象生徒：	目標値	60	70	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：	実際値	63	73	79	79
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「地域の学習環境」に係わる主な指標における成果目標						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
将来、自分の住んでいる地域のために役立ちたいという気持ちをもっている生徒の割合						単位：％
a	本事業対象生徒：	目標値	80	80	90	90（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：	実際値	68	82	91	91
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の能力認識」に係わる主な指標における成果目標						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
将来、自分の住んでいる地域で働きたいと思う生徒の割合						単位：％
a	本事業対象生徒：	目標値	80	70	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：	実際値	56	73	81	81
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の能力認識」に係わる主な指標における成果目標						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
難しいことや分からないことでも、失敗を恐れず挑戦している、挑戦しようとしている生徒の割合						単位：％
a	本事業対象生徒：	目標値	60	70	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：	実際値	87	88	93	93
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の能力認識」に係わる主な指標における成果目標						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
地域に愛情を抱いており、現在の生活に幸せや豊かさを感じている生徒の割合						単位：％
a	本事業対象生徒：	目標値	80	85	90	90（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：	実際値	79	91	98	98
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の満足度」に係わる主な指標における成果目標						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
地域の新たな魅力を再発見し、地域（県内）に定住したいと思う生徒の割合						単位：％
a	本事業対象生徒：	目標値	80	70	80	80（令和4年度）
	本事業対象生徒以外：	実際値	66	73	81	81
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の能力認識」に係わる主な指標における成果目標						

(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)				単位：％		
就職希望者の中で、県内就職を希望し、就職した生徒の割合						
b	本事業対象生徒：	目標値	85	90	95	95 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	91	88	94	94
目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)				単位：％		
就職希望者の中で、県内における各学科（農業等）に関係する関連産業（公務員含む）へ就職した生徒の割合						
b	本事業対象生徒：	目標値	40	45	50	50 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	55	33	54	54
目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)				単位：人		
就職希望者の中で、県内外における技術系公務員になる生徒数（県・市町村等における農業関連技術職）						
b	本事業対象生徒：	目標値	10	12	15	15 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	15	16	16	16
目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)				単位：％		
進学希望者の中で、県内における各学科に関係する大学等へ進学した生徒の割合						
b	本事業対象生徒：	目標値	12	15	18	18 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	22	20	21	21
目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
(その他本構想における取組の達成目標)				単位：％		
一人3つ以上の各種検定・資格を取得した生徒の割合（専門的資格や普通教科に関わる資格の両方を含む）						
c	本事業対象生徒：	目標値	90	75	85	85 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	59	70	54	54
目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
(その他本構想における取組の達成目標)				単位：部門		
農業クラブ全国大会優秀賞3部門以上						
c	本事業対象生徒：	目標値	1	2	3	3 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	0(未実施)	2	3	3
目標設定の考え方：令和元年度金足農業高校中期ビジョンの数値達成目標における成果目標						
(その他本構想における取組の達成目標)				単位：％		
地域協働事業を活用して研修等に参加した生徒の割合						
c	本事業対象生徒：	目標値	70	80	90	90 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	74	67	100	100
目標設定の考え方：アンケートによる調査（本事業への積極的な関わりを通じて、地域との協働意識を測定する）						
(その他本構想における取組の達成目標)				単位：％		
本事業における研究内容や取組について評価できるとの認識をもつ外部の割合						
c	本事業対象生徒：	目標値	70	80	90	90 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	92	96	100	100
目標設定の考え方：アンケートによる調査（本事業と関わりをもつ研修受入企業等、地域住民からの評価を測定する）						
(その他本構想における取組の達成目標)				単位：％		
本事業における研究内容や取組は、地域の活性化に繋がるとの認識をもつ外部の割合						
c	本事業対象生徒：	目標値	70	80	90	90 (令和4年度)
	本事業対象生徒以外：	実際値	89	92	94	94
目標設定の考え方：アンケートによる調査（本事業と関わりをもつ研修受入企業等、地域住民からの評価を測定する）						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 大学や研究機関、企業、農業法人等と共同研究もしくは連携し学習を実施した事業所数					単位：箇所
	10	10	20(目標15)	20(目標18)	31(目標20)	20(令和4年度)
目標設定の考え方：関係機関等と連携し、高度な技術や学習を深化させることで、本事業の成果を検証する。						
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 長期インターンシップ（県内外含む、7日間以上の研修をいう）に参加した生徒数					単位：人
	6	5	18(目標8)	13(目標10)	7(目標15)	15(令和4年度)
目標設定の考え方：関係機関等と連携し、高度な技術や学習を深化させることで、本事業の成果を検証する。						
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 本事業において、外部から講師を招聘し、講演や講義を実施した回数					単位：回
			20(目標20)	16(目標20)	23(目標20)	20(令和4年度)
目標設定の考え方：関係機関等と連携し、高度な技術や学習を深化させることで、本事業の成果を検証する。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 県内で生徒および教員が、様々な各種研修会や成果発表会等において成果を発表した回数					単位：回
	2	2	3(目標5)	6(目標8)	10(目標10)	10(令和4年度)
目標設定の考え方：本事業における研究成果の発信並びに情報の提供を通じて、外部の意見を次年度へ取り入れる。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 成果報告書を配付した冊数					単位：冊
			170(目標170)	170(目標170)	170(目標170)	170(令和4年度)
目標設定の考え方：本事業における研究成果の発信並びに情報の提供を通じて、外部の意見を次年度へ取り入れる。						
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 本事業において、教員自らが最先端技術や見識を深めるため、自主的に研修を計画し教員研修に参加した割合					単位：%
			90(目標70)	66(目標80)	83(目標90)	90(令和4年度)
目標設定の考え方：教員が本事業への意義を理解し、積極的に研修に参加したかについて成果を検証する。						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) OBや地域住民など、身近に全力で応援してくれる大人がいると思う生徒の割合					単位：%
		75	93(目標80)	90(目標85)	96(目標90)	90(令和4年度)
目標設定の考え方：高校魅力化評価システムアンケート調査「生徒の学習状況」に係わる主な指標における成果目標						
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域と協働して活動した回数（地域に出て活動並びに事業を行った年間の回数）					単位：回(延べ)
	20	20	20(目標20)	22(目標25)	30(目標30)	30(令和4年度)
目標設定の考え方：地域での協働活動の実態を測定する。						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
全校生徒数(人)	518	516	520	517	525
本事業対象生徒数			520	517	525
本事業対象外生徒数					

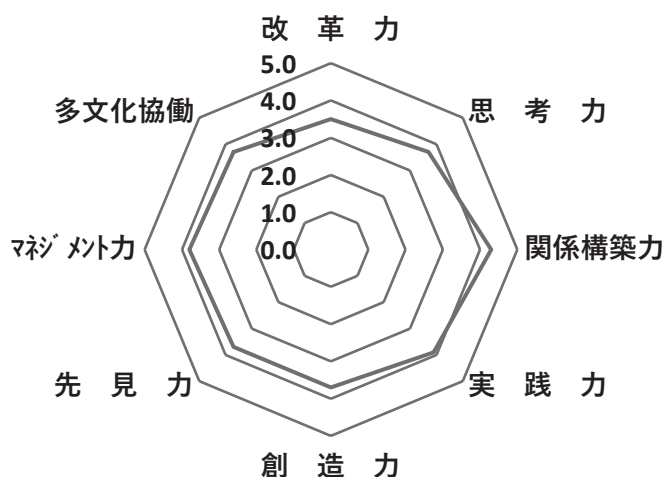
表6-2② 金農ValueRubric自己評価平均値

3年 全学科 Average

◎ 自己評価表

身に付けさせたい力		R3.1	R3.7	R4.1	R4.7	R4.11	計	最高値	3年間の変容
1	改革力	2.9	3.0	3.3	3.3	3.5	16.0	3.5	0.6ポイントの上昇
2	思考力	3.3	3.3	3.6	3.6	3.7	17.5	3.7	0.4ポイントの上昇
3	関係構築力	3.8	3.8	3.8	4.0	4.3	19.7	4.3	0.5ポイントの上昇
4	実践力	3.0	3.1	3.3	3.4	3.9	16.7	3.9	0.9ポイントの上昇
5	創造力	3.1	3.2	3.5	3.4	3.7	16.9	3.7	0.6ポイントの上昇
6	先見力	3.2	3.2	3.5	3.4	3.7	17	3.7	0.5ポイントの上昇
7	マネジメント力	3.2	3.2	3.3	3.3	3.8	16.8	3.8	0.6ポイントの上昇
8	多文化協働	2.9	3.0	3.2	3.2	3.7	16	3.7	0.8ポイントの上昇

直近の状況



◎ これまでの履歴

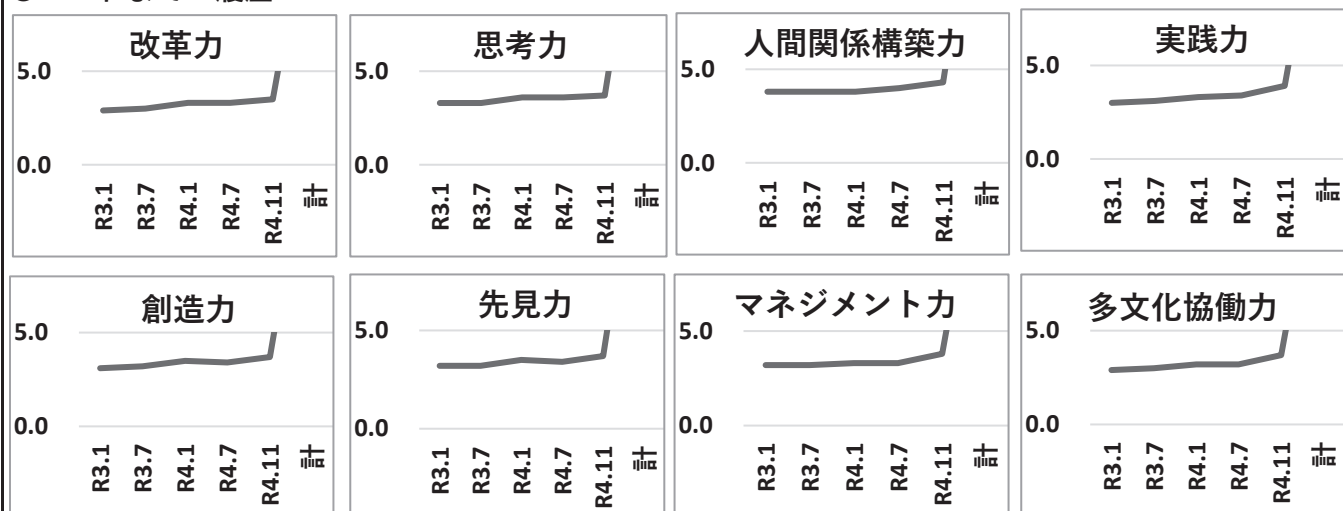


表6-4 R4年度 金農版GKH(Gross Kanano Happiness金農総幸福量)指標

心理的な幸福	1 あなたは、いまの生活に「幸せ」や「豊かさ」を感じていますか
	2 一日の大半を「穏やかな気持ち」で過ごせると感じていますか
	3 一日の大半を「思いやりの気持ち」を持って過ごせると感じていますか
	4 友人や家族などを含めて、他者の幸せや喜びを、自分の幸せや喜びとして感じていますか
自然環境	5 お住まいの地域の町並み(景観や緑)は良いと感じますか
	6 秋田県のシンボル木、もしくはお住まいの市町村のシンボル木を知っていますか
	7 秋田県のシンボル花、もしくはお住まいの市町村のシンボル花を知っていますか
	8 あなたは節電やゴミの減量など環境に配慮した生活をしていると感じますか
健康福祉生活	9 体を動かしたり運動をしたりすることができていると感じていますか
	10 毎日3食を摂るなど、健康的な食生活を送れていると感じていますか
	11 孤立感や孤独感を感じることなく生活ができていると思いますか
	12 心が安らぐ時間を持つことができていると感じていますか
	13 お住まいの地域に、安心して通うことができる医療機関が充実していると感じますか
	14 インフルエンザやコロナなどのウイルスがどのように人へ感染するか知っていますか
15 心身共に健康な生活を送れていると感じていますか	
教育	16 あなたはいま満足いく教育を受けていると感じていますか
	17 難しいことや分からないことでも、失敗を恐れず挑戦しよう・挑戦したいと思っていますか
	18 あなたは農業(各学科の学び)に興味や関心を持って授業を受けていると感じていますか
	19 この地域に農業高校は必要だと感じていますか
	20 秋田県に学びたい学部や分野のある高等教育機関(大学・短大等)があると感じていますか
地域産業文化	21 お住まいの地域にある農業や、企業(関連産業)は「元気で活力がある」と感じていますか
	22 お住まいの地域は、地域外から人が訪れたい「魅力のあるまち」だと感じていますか
	23 お住まいの地域文化や伝統、特色に「愛着や誇り」を感じていますか
	24 お住まいの地域に「頼れる大人」がいると感じていますか
	25 社会や地域のルール・規律を守ることは重要だと感じていますか
	26 OBや地域住民など、身近に全力で応援してくれる大人がいると感じていますか
	27 自ら地域の課題を発見して、解決に向け意欲的に取り組みたいと感じていますか
	28 自分が関わることで「社会や、地域を変えられるかもしれない」と感じていますか
	29 自ら地域の問題や課題に積極的に関わり、行動したいと思いますか
	30 この1年で、自分の暮らす地域を外からの視点で考える機会が増えたと思いますか。
	31 将来、自分の住んでいる地域のために役立ち、地域のために貢献したいと思いますか
	32 地域にある伝統や技能、文化を引き継ぎ、後世へ残すことは大切だと思いますか
	33 この1年間、地域で実施された文化活動、ボランティアや、募金活動等に参加しましたか
	34 高校もしくは大学卒業後に、農業または関連産業に従事(就職)したいと思いますか
	35 地域の新たな魅力を再発見し、地域(秋田県内)に定住したいと思っていますか
時間の使い方	36 あなたの一日の学習時間(学校での学習時間は6時間未満とみなす)は何時間ですか
	37 あなたの一日の睡眠時間は何時間ですか
	38 休日は勉強や部活動、友人との交流、地域活動等で有効に過ごせると感じますか
コミュニティの活力	39 あなたの住んでいる地域は、隣人同士のコミュニティ、助け合いができていると感じますか
	40 あなたの友人はあなたにとって何でも話せる安らぎの存在だと感じていますか
	41 あなたの家族はあなたにとって何でも話せる安らぎの存在だと感じていますか
	42 あなたが困っているとき、あなたを助けてくれる存在がいると感じていますか
良い統治	43 あなたは中央省庁(日本政府や日本の政治)をどの程度信頼していますか
	44 あなたは秋田県行政をどの程度信頼していますか
	45 あなたは学校(先生)をどの程度信頼していますか
	46 あなたはメディア(マスコミ)をどの程度信頼していますか
安心・安全	47 お住まいの地域で、犯罪の不安を感じることなく生活が送れていると感じていますか
	48 お住まいの地域で、交通事故の危険性を感じることなく生活が送れていると感じますか
	49 災害時に近隣の人と助け合う関係性がつくられていると感じていますか
	50 あなたの地域は、犯罪や事故、災害等を総合的にみて安心・安全な地域だと感じていますか

設問尺度	A(5ポイント)	B(3ポイント)	C(1ポイント)	D(0ポイント)	肯定的割合
1	感じる(74%)	やや感じる(24%)	あまり感じない(2%)	感じない(0%)	98%
2	感じる(70%)	やや感じる(26%)	あまり感じない(4%)	感じない(0%)	96%
3	感じる(67%)	やや感じる(31%)	あまり感じない(2%)	感じない(0%)	98%
4	感じる(76%)	やや感じる(23%)	あまり感じない(0%)	感じない(1%)	99%
5	感じる(68%)	やや感じる(27%)	あまり感じない(5%)	感じない(0%)	95%
6	知っている(66%)			知らない(34%)	66%
7	知っている(52%)			知らない(48%)	52%
8	感じる(37%)	やや感じる(42%)	あまり感じない(19%)	感じない(2%)	79%
9	感じる(61%)	やや感じる(27%)	あまり感じない(9%)	感じない(3%)	88%
10	感じる(75%)	やや感じる(17%)	あまり感じない(6%)	感じない(2%)	92%
11	思う(73%)	やや思う(21%)	あまり思わない(4%)	思わない(2%)	94%
12	感じる(74%)	やや感じる(23%)	あまり感じない(2%)	感じない(1%)	97%
13	感じる(76%)	やや感じる(18%)	あまり感じない(3%)	感じない(3%)	94%
14	知っている(81%)	やや知っている(15%)	あまり知らない(4%)	知らない(0%)	96%
15	感じる(66%)	やや感じる(29%)	あまり感じない(4%)	感じない(1%)	95%
16	感じる(74%)	やや感じる(22%)	あまり感じない(3%)	感じない(1%)	96%
17	思う(56%)	やや思う(37%)	あまり思わない(6%)	思わない(1%)	93%
18	感じる(57%)	やや感じる(36%)	あまり感じない(6%)	感じない(1%)	93%
19	感じる(87%)	やや感じる(13%)	あまり感じない(0%)	感じない(0%)	100%
20	感じる(38%)	やや感じる(31%)	あまり感じない(20%)	感じない(11%)	69%
21	感じる(46%)	やや感じる(45%)	あまり感じない(7%)	感じない(2%)	91%
22	感じる(40%)	やや感じる(37%)	あまり感じない(20%)	感じない(3%)	77%
23	感じる(56%)	やや感じる(37%)	あまり感じない(6%)	感じない(1%)	93%
24	感じる(64%)	やや感じる(30%)	あまり感じない(6%)	感じない(0%)	94%
25	感じる(85%)	やや感じる(14%)	あまり感じない(1%)	感じない(0%)	99%
26	感じる(69%)	やや感じる(27%)	あまり感じない(3%)	感じない(1%)	96%
27	感じる(44%)	やや感じる(42%)	あまり感じない(11%)	感じない(3%)	86%
28	感じる(36%)	やや感じる(34%)	あまり感じない(22%)	感じない(8%)	70%
29	思う(39%)	やや思う(43%)	あまり思わない(15%)	思わない(3%)	82%
30	思う(49%)	やや思う(32%)	あまり思わない(15%)	思わない(4%)	81%
31	思う(60%)	やや思う(32%)	あまり思わない(5%)	思わない(3%)	92%
32	思う(75%)	やや思う(23%)	あまり思わない(2%)	思わない(0%)	98%
33	ある(52%)			ない(48%)	52%
34	思う(36%)	やや思う(19%)	あまり思わない(20%)	思わない(25%)	55%
35	思う(54%)	やや思う(29%)	あまり思わない(11%)	思わない(6%)	83%
36	8時間以上(6%)	7時間以上8時間未満(9%)	6時間以上7時間未満(33%)	6時間未満(52%)	48%
37	8時間以上(15%)	7時間以上8時間未満(25%)	6時間以上7時間未満(40%)	6時間未満(20%)	80%
38	感じる(74%)	やや感じる(19%)	あまり感じない(4%)	感じない(3%)	93%
39	感じる(61%)	やや感じる(24%)	あまり感じない(12%)	感じない(3%)	85%
40	感じる(78%)	やや感じる(20%)	あまり感じない(1%)	感じない(1%)	98%
41	感じる(76%)	やや感じる(20%)	あまり感じない(3%)	感じない(1%)	96%
42	感じる(82%)	やや感じる(16%)	あまり感じない(1%)	感じない(1%)	98%
43	信頼している(28%)	ややしている(44%)	あまりしていない(23%)	信頼していない(5%)	72%
44	信頼している(25%)	ややしている(54%)	あまりしていない(18%)	信頼していない(4%)	79%
45	信頼している(47%)	ややしている(46%)	あまりしていない(4%)	信頼していない(3%)	93%
46	信頼している(16%)	ややしている(51%)	あまりしていない(28%)	信頼していない(5%)	67%
47	感じる(67%)	やや感じる(30%)	あまり感じない(3%)	感じない(0%)	97%
48	感じる(61%)	やや感じる(33%)	あまり感じない(5%)	感じない(1%)	94%
49	感じる(59%)	やや感じる(25%)	あまり感じない(14%)	感じない(2%)	84%
50	感じる(63%)	やや感じる(33%)	あまり感じない(1%)	感じない(3%)	96%

3年()科()番 氏名()

Portfolio of sustainable education and community

高校魅力化評価システム 組織診断ポータル

高校名 秋田県立金足農産高等学校

年度 2022年度

回答者数	注者・学生	158 (内訳)	1年生	0	2年生	0	3年生	156	4年生	0	5年生	0
(前年度)		142 (内訳)	1年生	0	2年生	142	3年生	0	4年生	0	5年生	0
本人		33 (内訳)	教職員	31	(前年度)	本人	11	(内訳)	教職員	10		

【MEMO】

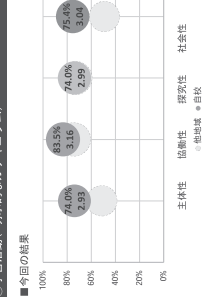
教育目標、育てたい生徒像など

Summary 総括表

	主体性	協働性	探究性	社会性
① 学習活動	3	4	3	3
② 学習環境	4	4	4	4
③ 自己認識	4	4	4	4
④ 行動変革	4	4	4	2
⑤ ウェルビーイング	4	4	4	4

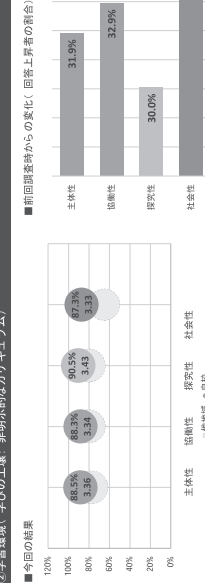
※学習活動評価割合が90%未満は、50~60%→2.60%、60%→3.60%以上→4

①学習活動(明示的なカリキュラム)



※上段の数値(%)、縦軸が学習活動評価割合、下段の数値が平均値

②学習環境(学びの土壌、非明示的なカリキュラム)



【学習活動】【学習環境】読み取り・検討の視点

- ・ 自校の強みや課題、それを増進・克服するための、価値のあり方は？
- ・ 昔ながら常識として取り組んでいた活動の機会や理解づくりは？その成果は出ていますか？
- ・ 協働を支えるコーディネート機能として、どのような役割が必要か？

How to read 結果の読み取り方

このポータルフォリオでは、以下の5つの側面、4領域、3軸により、高校と地域の学びの「いま」と「変じ」を読み取ることができま

- 5つの側面を → 各校・地域の状態を、「①学習活動」「②学習環境」「③生徒の自己認識」「④生徒の行動変革」「⑤ウェルビーイング」の5つから把握しています。
- 4つの領域から → 各設問を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4つの質・能力に関する領域に分類しています。
- 3つの軸で → 上記のデータを「前年度」「前年度からの伸び」「学年(前年度からの伸び)」「学年(前年度からの伸び)」「地域軸(地域との比較)」の3つの軸で整理しています。

結果に出てくる数字や言葉は次の意味を表しています。

- 【割合(%)】 → 各項目で「4. あてはまる」「3. どちらかといえばあてはまる」「2. どちらかといえばあてはまる」「1. あてはまる」「0. あてはまらない」という肯定回答をした割合(平均)
- 【地域】 → 同じ機会に調査を実施した他校の回答の平均値
- 【個人IDで紐づける割合】 → (個人IDで紐づける割合)を行い、複数回答を考慮した場合に表示) 前年と比較して、各領域の回答平均値が上がった回答者の、全回答者に占める割合(回答上昇者の割合)

■強み・伸びしろ

- 強み、得意分野が得意な項目
① 学習活動 86.5% (前年度)より向上
② 学習環境 86.0% (前年度)より向上
③ 自己認識 87.4% (前年度)より向上
④ 行動変革 87.2% (前年度)より向上
⑤ ウェルビーイング 87.4% (前年度)より向上
- 伸びしろ、改善の余地が大きい項目
① 学習活動 64.7% (前年度)より向上
② 学習環境 77.6% (前年度)より向上
③ 自己認識 67.3% (前年度)より向上
④ 行動変革 56.1% (前年度)より向上
⑤ ウェルビーイング 67.9% (前年度)より向上

■総合的な生徒の満足度

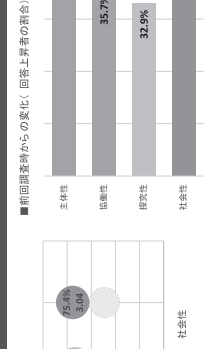
- 生活全体の満足度(0~10で6以上) 88.5%
- 前年、前々年からの増減 98.8%
- 高校に対する満足度 94.2%
- この学校を中学生にすすめることができる 93.9%

■総合的な大人の満足度

- この地域を推薦する準備として 84.8%
- おすすめることができる 100.0%
- この学校に関わってよかった 93.9%
- この学校を中学生にすすめることができる 93.9%

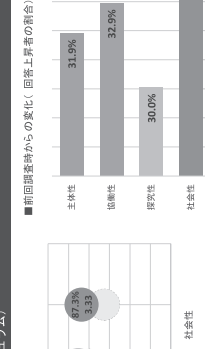
※学習活動評価割合が90%未満は、50~60%→2.60%、60%→3.60%以上→4

③行動変革(顕著・能力の発揮)



※前年度調査時からの変化(回答上昇者の割合)

④ウェルビーイング

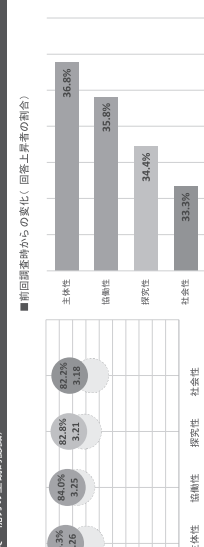


【生徒の行動変革】読み取り・検討の視点

- ・ 生徒に期待する具体的な行動は？
- ・ 生徒の自己認識との関係は？
- ・ 具体的な行動を促すような、学習活動や学習環境づくりはできているか？

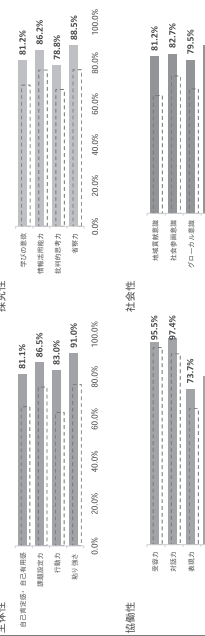
※前年度調査時からの変化(回答上昇者の割合)

⑤自己認識(資質・能力の主体的認識)



※生徒は他地域における肯定的回答割合

⑥行動変革(顕著・能力の発揮)



【ウェルビーイング】読み取り・検討の視点

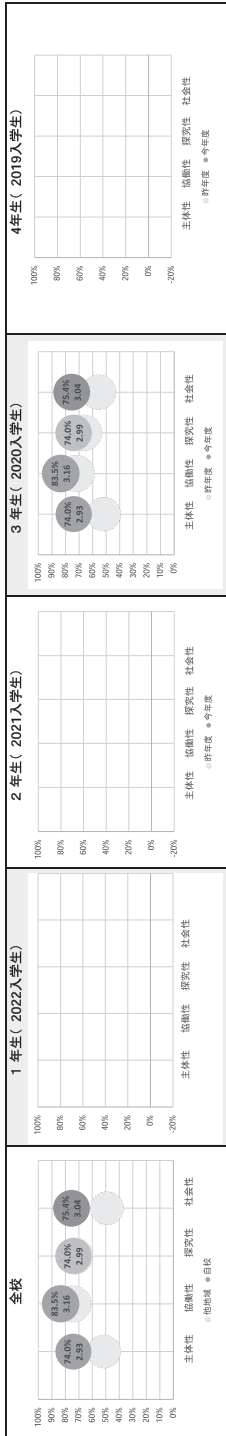
- ・ 学習環境や大人のあり方との関係は？
- ・ 生徒の資質能力との関係は？
- ・ ウェルビーイングの取組を学校目標にどう位置づけていくか？

Details 詳細結果

① 学習活動(明示的なカリキュラム)

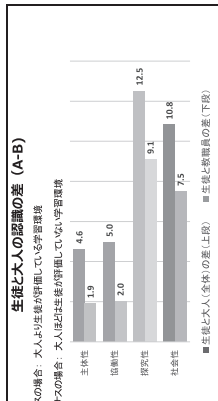
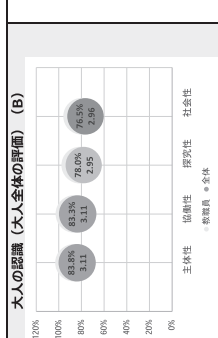
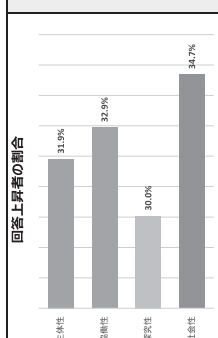
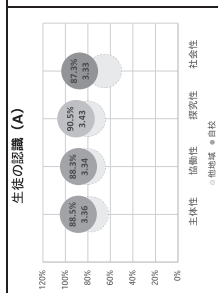
	全校		1年生(2022入学生)		2年生(2021入学生)		3年生(2020入学生)		4年生(2019入学生)	
	割合(%)	差(p)	割合(%)	差(p)	割合(%)	差(p)	割合(%)	差(p)	割合(%)	差(p)
● 10p以上の増加 ● 0~10pの増加 ● 減少										
主体性に関わる学習活動	74.0%	22.28	-	-	-	-	74.0%	22.28	-	-
5 自主的に調べものや取材を行う	83.3%	17.84	-	-	-	-	83.3%	17.84	-	-
6 学校外に調べものや取材に行く	64.7%	26.72	-	-	-	-	64.7%	26.72	-	-
協働性に関わる学習活動	83.5%	11.48	-	-	-	-	83.5%	11.48	-	-
7 グループで協力しながら学習や調べものを行う	86.5%	8.37	-	-	-	-	86.5%	8.37	-	-
8 活動、学習内容について生徒同士で話し合う	86.5%	2.03	-	-	-	-	86.5%	2.03	-	-
9 活動、学習内容について大人(教員や地域の大人)と話し合う	77.6%	24.04	-	-	-	-	77.6%	24.04	-	-
探究性に関わる学習活動	74.0%	7.67	-	-	-	-	74.0%	7.67	-	-
10 自分の考えを文章や図表にまとめる	67.3%	-3.26	-	-	-	-	67.3%	7.45	-	-
11 話し合った内容をまとめる	84.6%	9.26	-	-	-	-	84.6%	9.26	-	-
12 活動、学習のまとめを発表する	71.2%	8.48	-	-	-	-	71.2%	8.48	-	-
13 生徒同士で活動、学習の振り返りを行う	73.1%	5.47	-	-	-	-	73.1%	5.47	-	-
社会性に関わる学習活動	75.4%	19.79	-	-	-	-	75.4%	19.79	-	-
14 地域の魅力や資源について考える	79.5%	23.85	-	-	-	-	79.5%	23.85	-	-
15 地域の課題の解決方法について考える	77.6%	22.63	-	-	-	-	77.6%	22.63	-	-
16 日本や世界の課題の解決方法について考える	69.2%	12.89	-	-	-	-	69.2%	12.89	-	-

※3年生、4年生の回答上昇率(前1上昇率)で確認しております



② 学習環境（学びの土壌：非明示的なカリキュラム）

No.	項目	生徒の認識 (A)		生徒の認識 (A)					大人の認識 (大人全体の評価) (B)					生徒と大人の認識の差 (A-B)		大人質問項目
		割合 (%)	差 (pt)	全体	1年生	2年生	3年生	4年生	割合 (%)	時年度差の差	割合 (%)	時年度差の差	差 (pt)	差 (pt)		
19	地域から大切にされている雰囲気を感じる	88.5%	5.68	10.98	-	-	-	-	83.8%	3.03	86.6%	7.87	4.6pt	1.9pt	6 本校を誇りに感じることが出来る	
20	失敗してもよいや安全・安心な雰囲気がある	91.0%	12.15	13.70	-	-	-	-	75.8%	-6.06	77.4%	-2.58	15.3pt	13.6pt	13 挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある	
21	挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある	93.5%	2.04	2.82	-	-	-	-	93.9%	3.03	96.8%	6.77	-0.3pt	-3.2pt	13 挑戦する人に対して、応援するだけでなく、目標や当業者意識を持って挑戦することが出来る	
22	目標や当業者意識を持って挑戦している人がある	91.0%	0.88	9.20	-	-	-	-	84.8%	3.03	87.1%	7.10	6.2pt	3.9pt	6 目標や当業者意識を持って挑戦することが出来る	
23	地域に、尊敬している、憧れている大人がいる	77.6%	5.73	22.24	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7 自身の経験に、周囲を巻き込んでいる	
24	30人の距離に、関わることができる機会がある	82.1%	8.81	18.72	-	-	-	-	60.6%	-12.12	64.5%	-5.48	21.4pt	17.5pt	7 自身の経験に、周囲を巻き込んでいる	
25	自分が何かに挑戦しようと思ったとき、周りは手を差し伸べてくれる	96.8%	3.84	7.42	-	-	-	-	90.9%	27.27	93.5%	33.55	5.9pt	3.2pt	14 誰か何かに挑戦しようと思ったとき、手を差し伸べてくれる	
26	35 周りの大人は、自分に関わることで自分自身で決めることを尊重してくれる	93.6%	-	6.97	-	-	-	-	97.0%	-	100.0%	-	-3.4pt	-6.4pt	22 子どもの自己決定を尊重している	
27	36 生徒の意見が学校での意思決定に反映される雰囲気がある	82.1%	-	6.78	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
28	協働性に関わる学習環境	88.3%	4.15	8.00	-	-	-	-	83.3%	6.06	86.3%	11.29	5.0pt	2.0pt	8 人と関わり、新たな発見や学習している	
29	22 人は遠くから尊重される雰囲気がある	87.8%	8.24	7.24	-	-	-	-	81.8%	9.09	83.9%	13.87	6.0pt	3.9pt	9 ありのままの個人を尊重している	
30	23 ありのままの自分等尊重される雰囲気がある	91.7%	7.86	8.55	-	-	-	-	81.8%	-9.09	87.1%	-2.90	9.8pt	4.6pt	9 ありのままの個人を尊重している	
31	27 自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある	88.5%	-3.09	4.51	-	-	-	-	84.8%	12.12	87.1%	17.10	3.6pt	1.4pt	15 自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある	
32	28 立場や役割を超えて関わる機会がある	85.3%	3.57	11.68	-	-	-	-	84.8%	12.12	87.1%	17.10	0.4pt	-1.8pt	16 立場や役割を超えて関わりがある	
33	探究性に関わる学習環境	90.4%	4.45	10.26	-	-	-	-	78.0%	12.12	81.5%	18.95	12.5pt	9.1pt	10 本音や気持ちはよく伝えている	
34	17 本音を気兼ねなく言える雰囲気がある	90.4%	11.51	7.77	-	-	-	-	75.8%	21.21	77.4%	27.42	14.6pt	13.0pt	10 本音や気持ちはよく伝えている	
35	18 将来のことや夢について話せる大人がいる	95.5%	5.37	16.76	-	-	-	-	72.7%	9.09	74.2%	14.19	22.9pt	21.3pt	11 地域に、将来のことや夢について話せる大人がいる	
36	24 周りの大人は、じつは話を聞き、考えの手助けをしてくれる	92.3%	0.05	6.41	-	-	-	-	87.9%	6.06	93.5%	13.55	4.4pt	-1.2pt	17 生垣についていっしょに話を聞き、考えの手助けが出来る	
37	31 お互いに思いやりあふれる雰囲気がある	84.0%	0.88	10.12	-	-	-	-	75.8%	12.12	80.6%	20.65	8.2pt	3.3pt	18 お互いに思いやりあふれる雰囲気がある	
38	社会性に関わる学習環境	87.9%	6.71	22.13	-	-	-	-	76.5%	-7.58	79.8%	-2.66	10.9pt	7.5pt	21 地域で生活を営んでいるよう感じている	
39	19 地域から大切にされている雰囲気を感じる	95.5%	8.19	19.81	-	-	-	-	75.8%	-15.15	80.6%	-9.35	19.5pt	14.9pt	21 地域で生活を営んでいるよう感じている	
40	25 興味を持って学ぶことで知識が広がる大人がいる	90.4%	7.29	16.50	-	-	-	-	87.9%	-12.12	90.3%	-9.68	2.9pt	0.1pt	19 生垣の関心に関わり、機会を提供している	
41	29 地域の人が課題などに取り組む機会がある	84.5%	5.74	28.29	-	-	-	-	66.7%	-6.06	71.0%	0.97	17.9pt	13.6pt	20 地域の人が課題などに取り組む機会を提供している	
42	32 自分の働きや地域を、外からの視点で考える機会がある	78.9%	5.61	23.93	-	-	-	-	75.8%	3.03	77.4%	7.42	3.1pt	1.4pt	12 自分自身が地域をどのように捉えているかを考える機会を持っている	

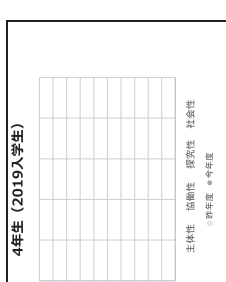
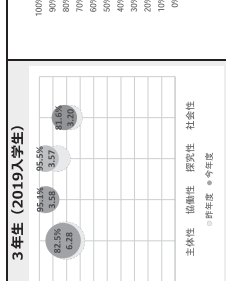
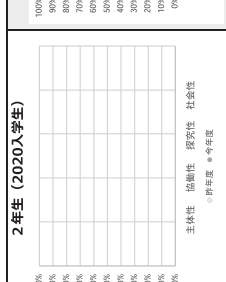
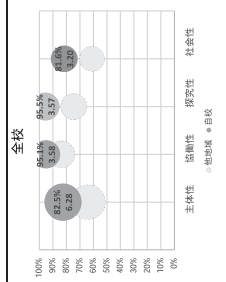


③ 生徒の自己認識（資質・能力の主観的認識）

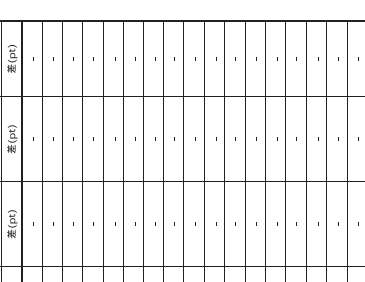
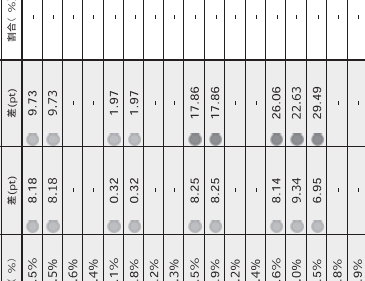
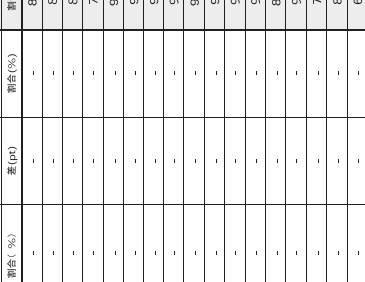
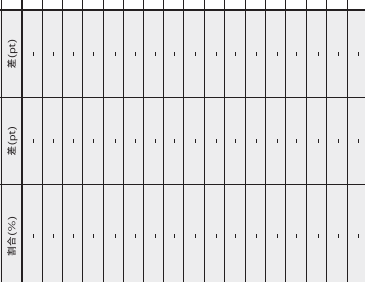
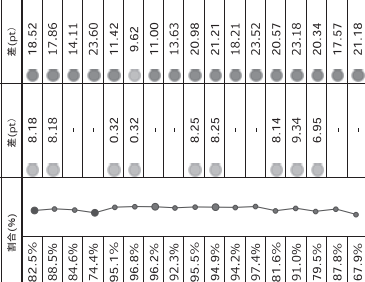
No.	内容	全校		1 年生 (2022入学生)		2 年生 (2021入学生)		3 年生 (2020入学生)		4 年生 (2019入学生)	
		割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)
	10pt以上の増加 ● 0~9ptの増加 ○ 減少 ●										
	主体性に関わる自己認識										
51	【自己肯定感・自己有用感】 自分自身は他人と異なると思う	85.3%	9.90	85.3%	9.90	85.3%	9.90	85.3%	9.90	85.3%	9.90
52	【課題設定力】 私は、自分自身に満足している	88.5%	11.37	81.1%	15.30	81.1%	11.37	88.5%	11.37	88.5%	11.37
53	【行動力】 現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	73.7%	13.86	73.7%	18.44	73.7%	13.86	73.7%	13.86	73.7%	13.86
54	【計画力】 目標を設定し、進捗を行動で確かめることができる	86.5%	9.78	86.5%	11.49	86.5%	9.78	86.5%	9.78	86.5%	9.78
55	【集中力】 自分一人で計画を立てて活動することができる	83.0%	11.53	83.0%	19.95	83.0%	11.53	83.0%	11.53	83.0%	11.53
56	【粘り強さ】 うまくいかなかったら、これは教育的に取組む	83.3%	10.80	83.3%	19.63	83.3%	10.80	83.3%	10.80	83.3%	10.80
57	【柔軟性】 柔軟な考えを相手や相手に伝えることができる	91.0%	6.87	91.0%	14.75	91.0%	6.87	91.0%	6.87	91.0%	6.87
58	【対話力】 相手の意見を丁寧に聞くことができる	90.4%	4.47	90.4%	11.14	90.4%	4.47	90.4%	4.47	90.4%	4.47
59	【表現力】 自分の考えを相手や相手に伝えることができる	91.7%	9.27	91.7%	18.35	91.7%	9.27	91.7%	9.27	91.7%	9.27
60	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	84.0%	9.33	84.0%	7.28	84.0%	9.33	84.0%	9.33	84.0%	9.33
61	【読解力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	95.5%	1.85	95.5%	2.28	95.5%	1.85	95.5%	1.85	95.5%	1.85
62	【対話力】 相手の意見を丁寧に聞くことができる	97.4%	5.89	97.4%	7.21	97.4%	5.89	97.4%	5.89	97.4%	5.89
63	【表現力】 自分の考えを相手や相手に伝えることができる	73.7%	17.03	73.7%	9.37	73.7%	17.03	73.7%	17.03	73.7%	17.03
64	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	80.1%	16.75	80.1%	9.98	80.1%	16.75	80.1%	16.75	80.1%	16.75
65	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	67.3%	17.31	67.3%	8.76	67.3%	17.31	67.3%	17.31	67.3%	17.31
66	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	79.5%	4.84	79.5%	8.19	79.5%	4.84	79.5%	4.84	79.5%	4.84
67	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	79.5%	4.84	79.5%	8.19	79.5%	4.84	79.5%	4.84	79.5%	4.84
68	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	82.8%	9.00	82.8%	11.39	82.8%	9.00	82.8%	9.00	82.8%	9.00
69	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	81.2%	8.43	81.2%	12.04	81.2%	8.43	81.2%	8.43	81.2%	8.43
70	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	75.6%	6.63	75.6%	2.91	75.6%	6.63	75.6%	6.63	75.6%	6.63
71	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	92.9%	2.10	92.9%	11.18	92.9%	2.10	92.9%	2.10	92.9%	2.10
72	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	86.2%	6.64	86.2%	9.71	86.2%	6.64	86.2%	6.64	86.2%	6.64
73	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	89.1%	6.71	89.1%	5.91	89.1%	6.71	89.1%	6.71	89.1%	6.71
74	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	83.3%	6.57	83.3%	13.50	83.3%	6.57	83.3%	6.57	83.3%	6.57
75	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	78.8%	12.77	78.8%	11.88	78.8%	12.77	78.8%	12.77	78.8%	12.77
76	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	70.5%	12.77	70.5%	17.31	70.5%	12.77	70.5%	12.77	70.5%	12.77
77	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	-	-	-	6.46	-	-	-	-	-	-
78	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	88.5%	11.70	88.5%	11.81	88.5%	11.70	88.5%	11.70	88.5%	11.70
79	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	88.5%	11.70	88.5%	11.81	88.5%	11.70	88.5%	11.70	88.5%	11.70
80	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	82.2%	9.11	82.2%	16.55	82.2%	9.11	82.2%	9.11	82.2%	9.11
81	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	81.2%	11.24	81.2%	20.23	81.2%	11.24	81.2%	11.24	81.2%	11.24
82	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	68.6%	10.84	68.6%	18.08	68.6%	10.84	68.6%	10.84	68.6%	10.84
83	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	84.0%	13.55	84.0%	19.43	84.0%	13.55	84.0%	13.55	84.0%	13.55
84	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	91.0%	9.34	91.0%	23.18	91.0%	9.34	91.0%	9.34	91.0%	9.34
85	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	82.7%	14.56	82.7%	17.95	82.7%	14.56	82.7%	14.56	82.7%	14.56
86	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	73.7%	9.14	73.7%	13.03	73.7%	9.14	73.7%	9.14	73.7%	9.14
87	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	88.5%	6.07	88.5%	3.73	88.5%	6.07	88.5%	6.07	88.5%	6.07
88	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	79.5%	7.19	79.5%	15.02	79.5%	7.19	79.5%	7.19	79.5%	7.19
89	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	84.6%	5.04	84.6%	12.47	84.6%	5.04	84.6%	5.04	84.6%	5.04
90	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	72.4%	8.35	72.4%	-0.92	72.4%	8.35	72.4%	8.35	72.4%	8.35
91	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	81.4%	8.17	81.4%	33.50	81.4%	8.17	81.4%	8.17	81.4%	8.17
92	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	87.2%	7.60	87.2%	20.77	87.2%	7.60	87.2%	7.60	87.2%	7.60
93	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	79.5%	6.95	79.5%	20.34	79.5%	6.95	79.5%	6.95	79.5%	6.95
94	【共働き力】 自分と他者異なる意見や価値を尊重することができる	94.9%	8.25	94.9%	21.21	94.9%	8.25	94.9%	8.25	94.9%	8.25

⑦ 生徒のウェルビーイング

	全校		1年生 (2021入学生)		2年生 (2020入学生)		3年生 (2019入学生)		4年生 (2018入学生)	
	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)
主観性に関するウェルビーイング	82.5%	8.18	82.5%	8.18	82.5%	8.18	82.5%	8.18	82.5%	8.18
81 今の生活を他に對する満足度 (0~10で評価：6以上の割合)	88.5%	17.86	88.5%	17.86	88.5%	17.86	88.5%	17.86	88.5%	17.86
82 普段の勉学の幸福度 (0~10で評価：6以上の割合)	84.6%	14.11	84.6%	14.11	84.6%	14.11	84.6%	14.11	84.6%	14.11
83 現在の日常生活に不安や心配事がない	74.4%	23.60	74.4%	23.60	74.4%	23.60	74.4%	23.60	74.4%	23.60
協働性に関するウェルビーイング	95.1%	11.42	95.1%	11.42	95.1%	11.42	95.1%	11.42	95.1%	11.42
66 この学校に入ってきたかと思う	96.8%	9.62	96.8%	9.62	96.8%	9.62	96.8%	9.62	96.8%	9.62
84 学校の一番は感じている	96.2%	11.00	96.2%	11.00	96.2%	11.00	96.2%	11.00	96.2%	11.00
85 大切な人を幸せにしたり、楽しませたりしていると思う	92.3%	13.63	92.3%	13.63	92.3%	13.63	92.3%	13.63	92.3%	13.63
探究性に関するウェルビーイング	95.5%	20.98	95.5%	20.98	95.5%	20.98	95.5%	20.98	95.5%	20.98
68 【専攻】自分の専攻について明確な希望を持っている	94.9%	21.21	94.9%	21.21	94.9%	21.21	94.9%	21.21	94.9%	21.21
86 自分の将来についての見通し (将来について明確な計画を持っている)	94.2%	18.21	94.2%	18.21	94.2%	18.21	94.2%	18.21	94.2%	18.21
87 自分の将来に向けて大切にしたいことを実行している	97.4%	23.52	97.4%	23.52	97.4%	23.52	97.4%	23.52	97.4%	23.52
社会性に関するウェルビーイング	81.6%	20.57	81.6%	20.57	81.6%	20.57	81.6%	20.57	81.6%	20.57
56 【再掲】将来、自分の住みたい地域に就きたい	91.0%	23.18	91.0%	23.18	91.0%	23.18	91.0%	23.18	91.0%	23.18
80 【再掲】地域文化や暮らし、自らの手で未来に伝えたい	79.5%	20.34	79.5%	20.34	79.5%	20.34	79.5%	20.34	79.5%	20.34
88 この地域を、将来豊かにする計画を立てておすすめてくれる	87.8%	17.57	87.8%	17.57	87.8%	17.57	87.8%	17.57	87.8%	17.57
89 日本の将来を明るくと思う	67.9%	21.18	67.9%	21.18	67.9%	21.18	67.9%	21.18	67.9%	21.18



	全校		1年生 (2021入学生)		2年生 (2020入学生)		3年生 (2019入学生)		4年生 (2018入学生)	
	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)	割合 (%)	差 (pt)
主観性に関するウェルビーイング	82.5%	8.18	82.5%	8.18	82.5%	8.18	82.5%	8.18	82.5%	8.18
81 今の生活を他に對する満足度 (0~10で評価：6以上の割合)	88.5%	17.86	88.5%	17.86	88.5%	17.86	88.5%	17.86	88.5%	17.86
82 普段の勉学の幸福度 (0~10で評価：6以上の割合)	84.6%	14.11	84.6%	14.11	84.6%	14.11	84.6%	14.11	84.6%	14.11
83 現在の日常生活に不安や心配事がない	74.4%	23.60	74.4%	23.60	74.4%	23.60	74.4%	23.60	74.4%	23.60
協働性に関するウェルビーイング	95.1%	11.42	95.1%	11.42	95.1%	11.42	95.1%	11.42	95.1%	11.42
66 この学校に入ってきたかと思う	96.8%	9.62	96.8%	9.62	96.8%	9.62	96.8%	9.62	96.8%	9.62
84 学校の一番は感じている	96.2%	11.00	96.2%	11.00	96.2%	11.00	96.2%	11.00	96.2%	11.00
85 大切な人を幸せにしたり、楽しませたりしていると思う	92.3%	13.63	92.3%	13.63	92.3%	13.63	92.3%	13.63	92.3%	13.63
探究性に関するウェルビーイング	95.5%	20.98	95.5%	20.98	95.5%	20.98	95.5%	20.98	95.5%	20.98
68 【専攻】自分の専攻について明確な希望を持っている	94.9%	21.21	94.9%	21.21	94.9%	21.21	94.9%	21.21	94.9%	21.21
86 自分の将来についての見通し (将来について明確な計画を持っている)	94.2%	18.21	94.2%	18.21	94.2%	18.21	94.2%	18.21	94.2%	18.21
87 自分の将来に向けて大切にしたいことを実行している	97.4%	23.52	97.4%	23.52	97.4%	23.52	97.4%	23.52	97.4%	23.52
社会性に関するウェルビーイング	81.6%	20.57	81.6%	20.57	81.6%	20.57	81.6%	20.57	81.6%	20.57
56 【再掲】将来、自分の住みたい地域に就きたい	91.0%	23.18	91.0%	23.18	91.0%	23.18	91.0%	23.18	91.0%	23.18
80 【再掲】地域文化や暮らし、自らの手で未来に伝えたい	79.5%	20.34	79.5%	20.34	79.5%	20.34	79.5%	20.34	79.5%	20.34
88 この地域を、将来豊かにする計画を立てておすすめてくれる	87.8%	17.57	87.8%	17.57	87.8%	17.57	87.8%	17.57	87.8%	17.57
89 日本の将来を明るくと思う	67.9%	21.18	67.9%	21.18	67.9%	21.18	67.9%	21.18	67.9%	21.18



第7章 次年度以降の課題及び改善点

～事業終了後の自走に向けて～

1 到達目標から見る最終年度の成果

今年度の到達目標は、「地域創造実践と提言」である。本事業1年目と2年目については、学校設定科目「地域創生論」や、関連産業における現場視察、出前授業等を通じて、地域の課題を把握し、探究活動である課題研究を通じてその改善方法を探ることができた。さらに各科における課題研究も充実した内容となっており、探究的な活動を深めることができた。

今年度はその改善策を踏まえ、学校設定科目「社会起業家実践」において地域活性化策や地域ならではの創造プランを作成し、地域に提言することで本事業のモデル構築を図っている。社会起業家実践とは、環境問題や地域再生をはじめ、社会的課題を解決するための手段のひとつとして、ソーシャルビジネスの考え方や手法について学習する科目である。この学びを通じて、地域そのものの在り方や、地域の未来について考えるだけでなく、地域政策にも積極的に参画するような姿勢や態度の育成に努めることができた。

2 本事業に対する各科の取組状況の是正

本事業に参加した生徒の延べ人数でいえば、1年目が811名、2年目が1,631名（前年比201%）、そして最終年目が2,392名（初年比294%）と約3倍以上の生徒が本事業に参画したことになり、極めて大きな成果だと考えている。一方で、昨年度の課題でもあった特定の学科やクラス、課題研究という少人数での取組が多く見られたことで、各学科間での取組状況に差が見られている点について改善することができなかった。本事業は今年度で終了するものの、この事業で得た人的ネットワークやスキルを活かし、各学科間における連携をさらに密にすることで情報共有を図りたい。

3 校内組織体制の強化と地域協働の情報発信による広報活動の推進

広報活動に関しては、今年度も約65%の教員が「本事業の取組が十分にPRできていない」と認識している結果となった。最終年度も可能な限り学校HPの更新回数増加やSNSの活用等含め、情報発信などを強化し県内外をはじめ、地域住民への周知を図る努力に努めたものの、その発信力不足については反省すべき点が見られている。

【地域との協働による高等学校教育改革推進事業 成果報告発表一覧】

日 時	事 業 名	発 表 者
9月28日	第11回高校生ビジネスプラン・グランプリへの応募	選B 起業家実践専攻
10月12日	「地域創生論」第7講での由利本荘市活性化プラン提言	選B 起業家実践専攻
10月15日	全国産業教育フェア地域協働プロ型発表会(青森市)	生物資源科3年2名
11月1日	農業農村工学会東北支部大会プロジェクト発表(仙台市)	環境土木科3年2名
11月18日	秋田県農林水産フォーラム高校生プロジェクト発表(秋田市)	生活科学科3年5名
12月6日	地域協働3年間の研究成果発表会(本校)	本校全校生徒493名
1月17日	地域協働全国サミット発表(Zoom オンライン)	主担当 照内之尋
2月2日	学校評議委員会報告(本校)	主担当 照内之尋
2月2日	秋田県教育研究発表会口頭発表(秋田市)	主担当 照内之尋
3月17日	地域協働成果検証事業発表会(Zoom オンライン)	主担当 照内之尋

4 指導と評価の一体化と金農総幸福量（GKH）指標の確立

今年度の各種評価では、本事業を通じて受動的学習から能動的かつ積極的な行動に変容するような結果となった。本事業終了後も評価の手法として、高校魅力化システムの活用、本校独自のルーブリックに加え、金農総幸福量（GKH）指標を策定し、これらの有機的相互関係を一体化させたシステムの構築については、引き続き外部からの指導助言をいただきながら、評価方法の確立ならびに運用を継続し大局的な評価指標となるよう努めたい。

5 新型コロナ対応について

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により実施できない事業が多く発生している。今後も、生徒の安全・安心を最優先に、オンラインを活用したセミナーで代替するなど、本事業の効果を高める工夫をしたい。

6 事業終了後の自走を見据えた取組について

(1) コンソーシアム構築の成果と課題

成果としては、個と個のつながりではなく「組織と組織」の連携が可能になったことが大きな成果として挙げられる。コンソーシアムにより両者の知識・技術・手法・思考の共有化、意思疎通が図られ、事業実施までの流れがスムーズに行えるようになった。一方課題としては、担当者との連絡調整や意思決定に時間を要する点に加え、学校からの投げかけ（一方通行）のみになりやすい点も危惧される。しかしながらコンソーシアムを構築する意義や成果の方が圧倒的な意味合いを持つため、今後も引き続き維持するとともに、秋田県立大学との連携協力協定も継続する方向で話が進んでいる。

(2) カリキュラム・マネジメント

地域の実情や実態を捉えた地域連携型カリキュラムへの改善と、本校が目指すべき姿「グランドデザイン」を整備する。カリキュラムは常に変動している「生き物」であるという観点から、常にカリキュラム改革を意識したカリキュラム・マネジメントを実施することで学校改善に努めていきたい。

また、関係機関ならびに外部有識者、講演者等のアーカイブ化による連携・協働体制を強化する。その際の留意点として、人事異動による協働体制機能の低下防止の観点から、校内の協働体制の維持と分掌の設置を検討していく。

(3) 予算措置について

本事業の終了とともに事業予算がなくなるものの、厚生労働省の建設業若年者理解・定着促進事業（通称つなぐ化事業）、秋田県の予算を見れば農業教育高度化事業（農林水産部）や森づくり県民提案事業（農林水産部）、持続可能な地域づくり事業（高校教育課）など多くの予算措置を可能とする事業が存在しており、それらの有効活用を行うことで予算の確保は可能と考えている。また、中央省庁等の企画競争・関係事業等を視野に入れた最先端の流れを把握する高いアンテナを保持しながら、教育界の潮流を把握していきたい。

(4) 高校魅力化コーディネーターやカリキュラム等専門家の配置と活用

本事業では、コーディネーターとして秋田県農業公社の職員、カリキュラム開発専門家として秋田県農業研修センターの職員をそれぞれ非常勤で配置し事業の運営を実施してきた。次年度以降その予算はなくなるものの、コンソーシアム同様、人的ネットワークと信頼関係の構築ができたことから、お互いの補完関係として今後も協力を得ながら進めていきたい。

(5) 科目「課題研究」における教科横断的な学びの推進ならびに学校間連携

「これからの高等学校教育について」（文部科学省初等中等教育局参事官高等学校担当令和2年11月25日）において、各高等学校の特色化・魅力化～各学科に共通して取り組むべき方策～として①スクールミッションの再定義、②スクールポリシーの策定、③地域社会や高等教育機関等の関係機関との連携・協議、④中山間地域や離島等の高等学校における多様な教育資源の活用、以上の4点が示されている。あらためて本校の中長期的な将来像を模索することが肝要であり、地域化・少子化に伴う学科再編を視野に入れた各学科における教科・科目横断的な課題研究の推進と、本校研究開発モデルの県内農業高校への波及ならびに学校間連携の推進が求められる。

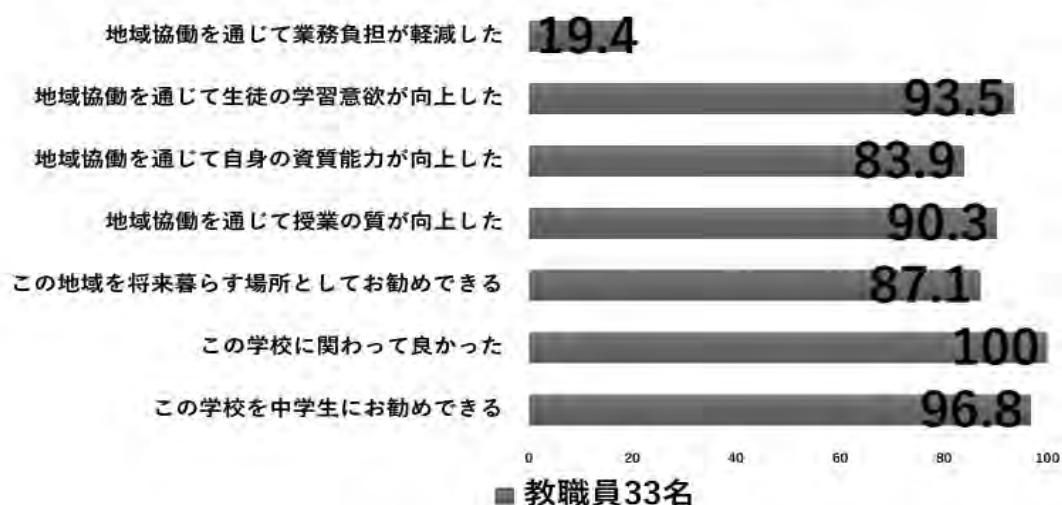
7 本事業のまとめと考察

生徒の変容として、地域に対する価値観の変化、郷土愛の醸成・再確認、地域産業への理解（知る）、そして自己肯定感や存在意義の向上が確実に見られている。目標設定シートにも記載しているが、「就職希望者の中で県内就職を希望し、就職した生徒の割合」が94%、「就職希望者の中で県内における各学科に係る関連産業（公務員含む）へ就職した生徒の割合」が54%であり、進路関係の項目においてその大半が3年間の目標を達成することができている。すなわち、本事業を通じて生徒の目標とする進路実現にも大きな貢献をしていることは明白である。地域産業を知ることは、地域の定住し地域を支える人材として不可欠な要素であり、進路指導においても極めて有意な取組であることが立証された。

一方で教員の変容としては、生徒の変容と同様に、地域に対する価値観の変化が見られるようになり、地域とともに学ぶ姿勢に加え、あらためて足下に教材があることを再確認することができた。また、教職員アンケートにも見るように、本事業を通じて「授業の質が向上した」「自身の資質能力が向上した」という回答を得ている。反面、「業務負担が軽減した」という割合は少なく、ワークライフバランスの観点で改善が必要だと思われる結果となった。しかしながら、GKHの評価・分析から明らかになったように、生徒の幸福感や充実度、豊かさはかなり高い次元で感じることができていることが分かった。人間にとっての「豊かさ」を物質的な豊かさから、全人間的なそれへと転換させて捉えようとする社会科学の流れが少しずつ現れてきているように感じている。

以上から、本事業の効果として地域と協働しながら地域を分厚く支える人材の育成という視点において極めて有意義な事業であったと考えている。

教職員によるアンケート調査（回答者33名）



【關係資料】

- (1) 第1回運営指導委員会議事録
- (2) 第2回運営指導委員会議事録
- (3) 秋田魁新報記事

令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」
第1回運営指導委員会（議事録）

【日 時】 令和4年6月27日（月） 10:30～12:00

【会 場】 秋田県立金足農業高等学校 会議室

【日 程】 10:30～10:35 運営指導員委嘱 校長 松田 聡
10:35 開会のことば 教頭 藤原 淳
10:35～10:45 出席者の紹介 教頭 高田屋 馨
10:45～10:50 管理機関あいさつ 高校教育課長 佐藤 進
10:50～10:55 実施校あいさつ 校長 松田 聡
10:55～11:05 運営指導委員長の選任及び運営指導委員長あいさつ
11:05～11:15 生徒によるプロジェクト研究発表
11:15～11:30 令和3年度の事業内容ならびに評価 教諭 照内 之尋
11:30～11:40 各学科からの取組状況について
11:40～12:10 質疑応答及び意見交換、運営指導委員による指導助言
12:10～12:15 諸連絡等
12:15 閉会のことば 教頭 藤原 淳

管理機関あいさつ 高校教育課長（佐藤 進）

皆さんおはようございます。只今ご紹介にありました高校教育課佐藤です。令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」第1回運営指導委員会の開催にあたり、県教育委員会を代表いたしまして、御挨拶申し上げます。運営指導委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃から本県高等学校教育の振興・発展に、格別の御理解と御協力を賜っておりますことに、心から感謝申し上げます。さて、金足農業高校は、令和2年度から当事業の指定を受け、産学官連携により、本県にとっての最重要課題である人口減少に対応しつつ、農業関連産業を変革することのできる人材育成に向けた教育課程の開発を行っております。2年目である昨年度は、初年度の「地域理解」に続き「地域の課題発見・解決」を到達目標としておりました。学校設定科目「地域創生論」や関連産業における現場視察を通して、地域の課題を把握し、各学科の課題研究を通じてその改善方法を探ることができたものととらえております。事業の最終年度である今年度は、「地域創造の実践」を到達目標としております。新たに開設した学校設定科目「社会起業家実践」は、地域の人々や社会と協働的な関係を構築するための手段を体験型の授業で学び、地域づくりを行う態度や意欲を育成することを目標としております。また、各学科の課題研究では、地域活性化策を実際に地域に提言することを目指し、実践的な活動の充実を図ります。一方で、昨年度の「高校魅力化評価システム」による評価では、金足農業高校生が抱える課題として、自分の考えを相手に伝える表現力が十分に育っていないことが挙げられました。こうしたことから、課題の克服を含め、事業の総仕上げの年度として充実したプログラムの実施が求められております。委員の皆様方には、本日の委員会において、専門的見地から忌憚らない御意見、御提言をお願いいたします。また、会議以外の様々な場面でお力添えをいただくこととなりますが、何とぞよろしく御支援のほどをお願いし、挨拶いたします。本日は、よろしく願いいたします。

実施校あいさつ 校長あいさつ（松田 聡）

本日はお忙しい中、運営指導委員の皆様方、そして伊東金一様、そして秋田県教育委員会の皆様にお越しいただき、ありがとうございます。また、本事業については、これまでたくさんのご助言・ご指導いただきまして、本当に感謝申し上げます。さて本事業は、今年度で3年目の最終年ということになります。昨年度は、運営指導委員会は5月の第1回だけの開催となりましたが、その際の運営委員の皆様方からのご指導・ご助言を生かしてこれまで取り組んで参りました。昨年度は、事業・研修合わせて46の事業を実施しました。その中で11回の「地域創生論」講義を実施しました。この「地域創生論」を通して、生徒たちの学びにどのように結び

ついたのか、あるいは将来という観点で地元秋田を見ることができるようになったのか、というような生徒の変容ぶり、これを検証することが大切だと思っています。事業の2年目が終了して作成した令和3年度の報告書があるのですが、そこに生徒の感想が載っておりますので、一部紹介したいと思います。3名ほど紹介します。1人目ですが、「秋田の課題が見つかったので、改善策を考えたい。秋田に住む女性のネットワークを構築し、コミュニティを形成したい。働きやすい秋田を創造したい」おそらく女子生徒だと思われます。2人目は「20年後の日本や秋田がどうなって、何が必要とされているのかをしっかりと見極め、自分なりにやりたいことを選択していきたい」。3人目は「若者の最先端である私たち高校生が自由で新しい発想力や創造力が求められているいま、地域創生論を受ける意味を再確認できた」ということです。いずれもこの事業を通して、秋田の将来のことを視野に入れた生き方を考える、そういったきっかけとなっているようであります。秋田県教育委員会の方でも、時代や社会の変化、本県の抱える課題等に積極的に対応するために「秋田県高等学校総合整備計画後期計画」を策定しています。その中の1つの柱に、こういうものがあります。地域と学校がともに地域の将来を考え、連携・協働して取り組む教育活動の推進という項目があり、その概要として、生徒一人ひとりがふるさと秋田を支え、秋田に貢献しようとする意識を高め、地域の課題を解決に取り組むことができる力を育成することが大切である。また、将来を担う若者を地域全体で育成するという観点から、地域と連携・協働した教育活動をこれまで以上に重視する必要があるとあります。本校でもこの事業を通じて、秋田県の人材育成方針を踏まえ、将来の秋田をけん引できる人材を育成したいと思っております。この事業を体験した生徒が卒業して、5年後、10年後、20年後どのような意識でいるのか、果たして起業した生徒はいるのか、見てみたいなど思っているところでもあります。最後になりますが、今年度は最終年度となります。事業に関する取り組みをより一層充実させていきたいと考えております。運営委員の皆様から多くのご意見を頂戴いただければと思います。また、本日は非常に蒸し暑くて、エアコンが実は壊れておりますので、適宜飲み物をお飲みになっても結構だと思いますので、よろしくお願いたします。それでは、短い時間ではありますが、本日はどうかよろしくお願いたします。

運営指導委員長挨拶（岡田 秀二）

皆さんこんにちは。委員長に選任されました。どうぞよろしくお願いたします。特に挨拶ということではないのですが、課長さんと校長先生のお話を伺って、大変強く感じたことがございます。それは、ご存知のように文科省は数年前から新しい時代の高等教育の在り方・検討要するにワーキングチームを作って、既に多くの報告を発表しております。そういう報告を見ると、背景としては実は我が国の高校生の学習意欲が非常に低下しているということと、もう1つ、18歳は大人であるということが、法律的にも新しくなっているわけですけれども、その高校生の社会性、すなわち社会に対する関心が大変低いということが根底にあって、新しい時代ということに高校教育はどうしたら良いのか、強い問題意識として持っております。もう1つは、お話のように、地域が疲弊しているということと、人口減少が大変激しいということが背景としてあるのですけれども、我々が直接関わる背景としては、先程言った点と只今課長さんあるいは校長先生のお話を伺いますと、この事業で金足の生徒さんたちは、大変大きな成果を得てきているなどいうことを強く今思っております。この事業の成果と皆さんの取り組みの成果ということになるかと思いますが、この先もまだ金足のあるいは秋田県農業の根底を担う専門教育がということではなくて、我が国全体にとっても大きな影響を与えうる可能性が高いなどと思って期待をしております。どうぞ、皆さんが再度このような場を設けて繰り返し確認をいただくことが大事だと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

質疑応答及び意見交換、運営指導委員による指導助言

運営指導委員（齋藤 了）：

地域で働きたいというような、そういう考えの人が十数パーセントアップしているという実態を見てですね、秋田は何もないよというのがだいたい一般的に言われる言葉ではありますが、今までもその秋田の魅力に気づいて、発見してくれて、「地域創生論」の成果じゃないかなと思います。意識が少しずつ変わってきたというのは非常に良い成果ではないかと思います。これから、それをどのような形で意識として見えてきたということは、まずスタート段階に立ったということですので、これからそれをいかにして、どのような形で秋田の定住、あるいは秋田の役に立つ、秋田の貢献に結び付けていくのかというあたりを具体的にイメージして、それを実践に移していくというのが、大事になっていこうと思います。ただ、そうするとどういう形で役に立つのか、どういう職業に就くのか、こういう順番付けでなっていくのでしょうかけれども、そういう理想的な順番でいくことはなかなか難しいと思います。ま

ず、今コロナ禍の中で秋田に貢献したいという県内就職希望者もかなり増えていますけれども、私ここに来る前に、いろいろ中学生を対象に企業ガイダンスとかをやっていました。そしたら、高校生でも中学生でも小さい子から秋田の魅力なり秋田の企業の良いところなりを紹介したいということでやっていました。そういうことをやっていると秋田の企業にもピカッと光る企業がたくさんある。ただ、それを知らない。何年やって、どうやって役に立って、力をどんなふうにつけるかという順番でいくのも大事なのでしょうけれども、そういう企業の実際のところを見ていただいて、いわゆる地域実践のところに入るのかもしれませんが、どういう形になれば役に立てるのかなというところから入って、秋田のために何が役に立つのかというところを再発見する場にもなるかもしませんので、企業の方々をご紹介するよりも、都会と比べて秋田の企業、あるいは秋田の実践者の方々の考え方、そういうところに触れる機会をより多く作っていただいて、これからどういうふうな形で生きていこうかというのを具体的にイメージできるようなプログラム、キャリア教育として定着していくのではないかと感じます。ですから、そういう意識が芽生えてきた、増えてきたというのが非常に重要な成果だったと思いますので、そこから一步具体的に実践していくためにはどうしていくかという方向がまた一つ、色々な手法で考えていただければ良いかなというふうに感じたところであります。私、社長会議というもので、県内の色々な分野の社長さん方を集めて情報交換をすると、社長さん方はすごく人材不足で困っています。そういう困っている中で、うちの会社はこういうものを頑張っている、PRする機会を作ってほしいという社長さん方もいっぱいいます。そういうところの人方に実際に来てもらって話をしてもらったりするような機会を作っていただければ、マッチングを含めて良い機会になるのではないかなというふうに感じます。

運営指導委員（藤村 幸司朗）：

まずお話の中で農林政策課の高度化事業のお話をいただきました。これは国の事業でございまして、様々な農業法人等、現場の方のですね、農業高校の生徒さんたちにお聞きいただけるような取り組みのきっかけづくりという面で農水省の方の事業でございませけれども、大変良いきっかけになっているなというふうに思いましたし、現場で特にスマート農業の関係、先程のGPSの話とか色々あります。現場の方に、今そういった最先端の農業機械等が入ってきています。特に最近その圃場の中で、コンバインがどこの部分が、収量が少ないかというものに位置情報を落とし込んでですね、翌年の田植えの施肥の段階でそれを収量の少ないところに多く落とすとかですね、そういったような試験も現場で実は始まっています、それを試験研究が後押ししているような事業を通じて、ですからこういった事業を通じて、我々もその、ぜひ農業の最先端の部分を高校生の皆さんに見ていただけるきっかけになったら良いと思っています。この後も続けて、この事業は3年間で終わるということでしょうけれども、高度化事業についてはまだまだ続いていきますので、そういったものを上手く使ってですね、ぜひ県の方との連携をこの後も継続して続けていきたいなというふうに強く感じたところでございました。それからあの、この資料でGKH指数が1年次から下がったというデータがちょっとありましたけれども、あの、この見方として単純に下がってだめというよりはですね、現場のことを1年の時はただ知っただけで、もしかすると2年になってさらに深く掘り下げて分析をする力が付いて、そういった面からなかなか簡単にはいかない、難しいというようなところで、ちょっとポイントが下がっているというような見方ももしかしたらできるのではないかなとも思いましたので、完全に下がってその残念というような評価ではなくて、もう少し掘り下げてみても面白いなと思って見せていただきました。それから、齋藤理事長からもお話ありましたけれども、地域の担い手として政策決定に関わりたいたかですね、私に関わることで社会を変えられるかもしれないというこのパーセントの伸びっていうのは、素晴らしいものだと思っておりまして、こういうふうに感じられるっていうことが、まずすごくその学習評価としては高かったというふうに見られると思います。こういった取り組みにおいて、普通高校ではどういう展開ができるのかなと、私も今ちょっと話を聞きながら、難しいなとも思いつながら、まずはできるところからということで、例えば農業系の学校さんに同じような取り組みを広げていこうとか、そういったところから徐々に始められていくことで、金農の成果が県内に波及していくことをすごく期待したいなというふうに思いました。以上です。

運営指導委員（藤 晋一）：

非常に色々な取り組みをされていることを評価させていただきます。うちの県立大学も活用していただいて、色々事業だとか実習をやっていることは、私たちにとってもすごく良い地域貢献になっていると思いますので、引き続き私たち大学の協力あるいは学生も取り込んだような形で何かやっていただけると、非常に面白くなっていくのかなと、特にOBはたくさんいますので、そういった方を取り込んだ事業転換というのを考えていただければなというふうに思います。それから、こういうプロジェクトで一

番問題なのは、3年間ですから、「3年間で終わります」ということではないと思いますので、この3年間終わった後のところから、どう取り組んでいっていかっていくのを今から良く考えていただければと思います。当然、秋田県立大学の場合はそれに対して協力をさせていただくと思います。また協定も結んでいますので、そういったことを考えていただきたいなと思っています。それから、普通科高校の場合は、やっぱり大学受験に向けてという勉強の取り組み方というのがあって、あまりこう自分たちもそうだったけど面白くないというか、受験勉強のための3年間というイメージがあると思うが、やっぱりこういう実業高校の場合はそこで学んでいくことで少しずつその仕事に就くため、あるいはさらにはもっと良いのは、その後進学する率が高くなってくれば、農学部だとか林業関係だとかそういったところにも進んでいく生徒さんが増えるというのも1つの考え方だと思っています。そういったことにも役に立てば金農に行けばこんな面白いこと勉強ができて、その後こういう地域にも役に立てるし、大学に行く学生さんも多いというところにシフトしていくと、魅力ある高校づくりができるのではないかと。金農の多くは非農家の生徒さんがすごく多いというふうに向っているんで、そういった中で農業に対する、自分は農家ではないけれども、農業に対する意欲、これから農業法人が増えてくると農業法人で働くっていう、農家ではないけど農業法人で働くっていうシステムがだんだん出来つつあるので、その中に生徒さんを上手く巻き込んでいくというのが1つかなと思っています。そういったところがなんか、1年生のところにも、2年生になった時にも調査をするとモチベーションが上がってきて、それがグラフに見えてきていかなというふうに感じました。生徒の評価にしても、1年次のGKHが1から3ポイント層の生徒が上がったのはやはり、実業高校ならではのもの何だろうかと。中学校で学んで成績で金農に入ったけども、その成績でもそんなにイメージが高くなかった子でも、実業的な実践的な教育を受けることによって、たぶん上がったと思います。そういった子を引っ張り上げるっていうのもすごく大事なことだと思うので、そのあたりのことも考えながら最後の1年やっていただければと思います。

運営指導員（椎川 浩）：

地域を支えようとする意識が高いこと、非常に心強いと思いました。それですね、やはり継続するためには、誰かから評価を受けると、秋田の消費者から評価を受けることで、より目的意識が育つのではないかとというふうに思います。先程食品流通の方と生活科学の発表で、この後の展開と課題というのがありましたが、例えば一例でいうと、地元生協さんと組んでですね、生協の組合員は消費者ですので、やはり消費者に近い所で活動を展開してみるのも1つあるのかなというふうに思います。そういうことで、先程のレガシーの継続にも繋がっていくのかなと思います。発信の場も必要だということですが、うちの中央会の仕事ですけども、種苗交換会も毎年11月・12月にございますので、その辺もご活用いただければというふうに思いますので、どうかよろしく願います。以上です。

運営指導委員（細川 和仁）：

先生方もたくさんおっしゃっていただいたので、繰り返しになる部分もありますが、私もやっぱり高校魅力化評価の結果のところすごいなと思っていて、地域の担い手として政策決定に関わりたいたか、私に関わることで社会を変えられるかもしれないとか可能性に対するこのポジティブな意識があげつない伸びをしているなという気がいたしました。これってやっぱり、開発されたカリキュラムの内容が関わっているというふうに思います。それは生徒さんにとって、面白いとか楽しいとかっていうことだけじゃない、刺激的なとか、こう考えさせられるとか、表現悪いですけど煽るっていうのでしょか。もっとかかってこい、みたいなそういう部分があるのではないかと推測しています。そういった開発されたカリキュラムの内容が高校生の皆さんの意識を変えているということを感じるということと、それから自分の考えをはっきり相手に伝えられるというのは、藤先生方からおっしゃっていただいた通りで、そのまま私も同じで、下がったとは言えないのかなと、まあ逆にいうと、これが例えば71とかになっても上がったとは言えないのかなというような感覚を持ちます。それよりも、数値の評価にも出さないといけないので、すごく重要なところであるのと同時に、先程各科の先生の説明をしていただいた中で自分の言葉で心に響くような表現で語るができる生徒さんが出てきているというところ、すごく重要だと思っています。つまり、何が言いたいかという、先生方が指導する中での手応えというか、生徒がこういうふうに変わってきた、書くことがこんなふうに変わってきた、言うことがこんなふうに変化してきたっていう、その捕まえたものがすごく重要だと思うので、そういったものをぜひ蓄積していただきたいなと思います。逆に言うと、数値ではこうやって上がっているけど、いやいや自分が指導している感覚ではそこまででもないよな、やっぱり課題は大きいよなっていうところ

るもすごく重要だと思うので、そうした先生方の目というか、そうしたものもぜひ評価にばんばん放り込んでいただければというふうに感じました。以上です。

実施校 研究開発主任 (照内 之尋)

私の方から、それぞれの先生方から色々なご助言、コメント等いただきましたので、それに関しまして、私なりに解釈した部分でお話しさせていただきたいと思います。まず、農業公社の齋藤理事長さんのお話しですけれども、実は私は3年生の担任をしておりますが、実は今のこの時期、3年生となると具体的に就職するのか、進学するのかという具体的なところがでてくるのですが、去年まで、県内就職しますと言っていた生徒が、実は「地域創生論」を通じたことによって、地域づくりに関する大学あるいは学科で勉強したい、そういうふうな生徒もいましたし、2年近く地域の様々な関連産業の現場を視察する中で、県外に行こうと思っていたけど、県内の会社に就職したいとか、あるいは県内にこういった会社があることを知らなかったのも、ぜひ地域に就職したいという子もクラスに何人か出ていますので、そういう意味では、進路指導に関しても一定の効果は、この事業の成果というのは出てきているのかなということが1点です。

それと、今年の1月に秋田の魁新聞が調査した「若者のミカタ」という報告がありまして、それを見ると、秋田県内の10もしくは20代の若者のアンケート結果として、若者が求めるキーワードは何ですかというところで、やはり賃金、給料、企業そういった視点を挙げていました。働く場を重視しているということですので、もちろん大切なことではあると思いますが、齋藤理事長さんの方からもお話しありましたが、岡田学長の言葉を少し借りるとすれば、少しでも地域に目を向けて、しっかりと社会と地域を捉えることができるようになれば、またその視点も変わってくると、地域の仕事の魅力を改めて知るとそれに伴って、充実感や地域への魅力が出てくると考えております。それから、藤先生の方からご指摘ありました、この事業の大きな課題が、この後終わった後どうするかということが非常に重要なポイントです。この事業が採択された時点で3年後予算がなくなるということは分かっていますので、お金があるからできる、お金ができないからできないという議論ではなく、予算が無い状態でもこの事業をどうやって上手くやっていくかということが、運営を直接担当する私としては、すごく大きな課題を突き付けられているなというふうに思っています。先程から何回も話題になっていますが、例えば農林水産部さんの方であれば高度化事業の予算あるいは高校教育課であれば、宮腰先生からもお話しありましたが、ものづくり支援事業とか、そういった秋田県の方でも様々な事業がございますし、また国の方でも、それこそ意欲と実行力があるところにはお金を出すよということで様々な事業がありますので、そういったものを受けて、アンテナを高くしながらやっていければと考えております。また、細川先生の方からも以前個別にご指導いただきましたが、まず可能な限り無理のない自走のシステムを作り上げていく必要があるのかなというふうに考えております。この事業がこれから地域を支える生徒たちのためにあると思っていますので、再三になりますけれども、この今年度の3月で終わって、はいじゃあこれでこの事業は終わりですということにならないように、上手くやっていかなければいけないということと、それに伴う校内の先生方のシステムというか、先生方の異動等もありますので、特定の先生が異動した時にこの事業がストップするとか、そういうことにならないように、組織化、体制づくりもしっかりやっていかなければならないということで、ぜひ引き続き色々ご指導いただければと思います。

運営指導委員 (齋藤 了) :

ちょっと良いですか。生徒の方々が重視する賃金だとか企業だとかっていうキーワードってお話ししていらっやいましたけども、それは分かります。実際そういう気持ちだろうなと思います。例えば賃金のことだけ話をすれば、最近秋田県もICT関係の会社ですとかが秋田に進出してきて、ほとんど給料が都会並みっていうところもあります。で、大抵はそうなればこちらの方に住んで、マイホームを建ててですね、可処分所得がかえって増えるわけですから、そういう方たちもいますし、それに給料が少し安くても、相対的に安くても、首都圏の企業と遜色ないので、そこで良いよという人もいます。そういう、キーワードを捉えて、キーワードで秋田の企業がこういうところが勝っている、良い所があるというところを理解してもらえような、そういう機会を地元の会社社長さんとかからお話を聞きます。そういう機会を設けていただければ、具体的な秋田に残るイメージがつくと考えます。イメージがついた段階で、大学で県外に行っても良いのです。行って、でもそのことが、金農で学んだということがまだ頭に残っていて、じゃあ帰るときは秋田に戻ってからやろうかと、そういう結び付てくれれば良い。まず在学中にキャリア形成として、その自分たちが重視する企業性だとか、重視するキーワードに沿って、秋田の企業っていうのはこういうところがあるというのをしっかりと見付けさせ

てもらえるような、そういう教育カリキュラムがあったら良いかなと思います。

運営指導委員長挨拶 (岡田 秀二)

指導員の先生方から大変良い意見がたくさん出ているのですが、ちょっと違う角度で私なりの評価みたいなものをしてみたいと思います。この事業が始まって、第1回目の会議をやった時に私は大変心配をしました。それは、つくりだとかその方、あるいは教育委員会の方と学校の具体的に生徒と関わる先生方とプロジェクトリーダーのちょっとその意識の乖離が大きいなということで、大変心配でした。2年経ちましたが、今日話を伺うと、大変素晴らしい進展を遂げているというのが私の喜びでございます。それは、各学科の先生方からの話です。生徒の様々な経験とか、姿勢、そして具体的な活動内容を先生方自信がものすごくこの大きな評価をし、自らの努力の成長といえるような、そういう発言内容で、大変素晴らしいなと思いました。学校はやはり、生徒が主体になる。事業とかプログラムとか、あるいはある種の論理が、専攻がなく、生徒とともに歩んで行くという。これが、学校組織の非常に重要ところだということをお強く感じます。で、この件については、実はこの研究開発のリーダーである照内先生は、生徒の内発的な発展が醸成されていくことを期待したいと、以前触れていました。そのことが実は大変良く出たなということで、大きな効果を与えています。先生方はいずれも客観的な視点から見ている、その位置に立っての話で、これはこれで非常に重要だと思っています。いますが、ここはもう一段階乗り越えることが十分可能だと思って、お話を伺いました。その調査の1つとして、照内先生は大変この実践力・創造の数値を大きく評価していて、これはこの通りだと思います。思いますが、一方でこの評価の具体的な内容はやはり、生徒の個人がどのように自分を評価するかということで、ところが、この事業そのものが持っている意味というのは、単に学習能力を鍛えるそのことだけではなくて、地域における高校としての役割をこれからは全面的に発揮していかなければなりませんという、そういうことを事業としては課題化していますし、目標として持っています。照内先生がおっしゃった、まさに生徒が個人として自分このように成長できたよということを言っているんですが、内発的な発展と次の段階はそれを社会化していくということにやっぱりあるので、その具体的な項目は、文化・協働力、そして社会全体を見る先見力、そして人間構築・関係構築力、そしてもう1つは、改革力は個人の自らの改革力と同時にそれを社会化した段階の社会にとっての改革、それへとアプライしていかなければならないと、こういうことを考えると、今言った項目は依然として点数低いんですけど、可能性は次は上手くって、課題はここにあるということ、実はこの表はですね、良く示してくれているなというふうに思っています。その点は、先程指導の先生方から色々な角度で教えていただいています。ですから、事業が終わって次なる課題はまさに高校が高校として閉じるのではなくて、地域に開くと同時に地域との協働の中で地域における役割を上手にやはり発表していくその側面だなと。ここに関わって、実は高校の先生方全員が金農としてまさにここで具体化していけるという展望が得られたという、このように強く感じます。大変素晴らしい成果を挙げたと思いますし、課題をますます明確になっているなというふうに思います。もう1つ注文を付けるとしたら、これは金農や農業高校だけの課題ではなくて、コンソーシアム全体としてやっていくべきことだということで、この先はコンソーシアムとしてのそのところの課題を具体的にやっていきたいところものだというふうに思います。以上です。

実施校あいさつ 校長あいさつ (松田 聡)

本日はどうもありがとうございました。うちの職員の環境土木科の中嶋の話聞きながら感じたのですが、林業の植林体験をしたと、さらに産業用水についても学んだと、そういうことを考えますと、林業はわかる、産業用水もわかる。点と点あったものが、体験することで線になったと思います。そうすることで、社会の仕組みとかメカニズムを深く理解することができた。こういった体験を、まだまだ続けていきたいなと、できれば良いなと思っておりました。委員の皆様方から色々な意見あったのですが、一人ひとり触れますと、齋藤理事長のお話して、秋田の企業に光るものがあるということなのですが、高校教育課では、ふるさと企業紹介事業というのをやっております。これあの、秋田県高等学校に就職支援員という方が何名か配置されておまして、その先生方が就職する生徒のいる学校に出向いて、映像を見せながら秋田の企業を紹介するというのがあります。本校にも就職支援員がおりますので、これからそういった事業とタイアップができれば幅が広がるかなと、一層魅力ある企業を紹介できればなと思っております。あと最後に、岡田委員長からはですね、最初は不安であったけれども、科の先生たちの話を聞いてちょっと安心したというお話がありました。ありがとうございます。これからは最後の1年となりますので、全職員を巻き込んで、そしてまた、そうすることで事業が終わってからもその雰囲気がずっと続くのかなと、思っておりますので、全職員を巻き込んで取り組んでいきたいなと、思っております。

令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」
第2回運営指導委員会（議事録）

【日 時】 令和4年12月6日（火） 13:00～14:30

【会 場】 秋田県立金足農業高等学校 会議室

【日 程】 13:00	開会のことば	教頭 藤原 淳
13:00～13:05	出席者の紹介	教頭 高田屋 馨
13:05～13:10	管理機関あいさつ	高校教育課長 佐藤 進
13:10～13:15	実施校あいさつ	校長 松田 聡
13:15～13:20	運営指導委員長あいさつ	富士大学学長 岡田 秀二
13:20～13:35	3年間の成果報告	研究開発主任 照内 之尋
13:35～13:45	各学科からの報告	各学科主任
13:45～14:25	質疑応答及び意見交換、運営指導委員による指導助言	
14:25～14:30	諸連絡等	
14:30	閉会のことば	教頭 藤原 淳

管理機関あいさつ 高校教育課長（佐藤 進）

令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」第2回運営指導委員会の開催にあたり、県教育委員会を代表いたしまして、御挨拶申し上げます。運営指導委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃から本県高等学校教育の振興・発展に、格別の御理解と御協力を賜っておりますことに、心から感謝申し上げます。さて、金足農業高校は、令和2年度から当事業の指定を受け、今年度最終年度を迎えました。事業の総仕上げとして「地域創造の実践」を到達目標に、学校設定科目「社会起業家実践」では、地域の人々と社会と協働的な関係を構築するための手段を学ぶ体験型授業を実施し、各学科の課題研究では、地域活性化策を実際に地域に提言することを目指し、実践的な活動の充実を図ってまいりました。その成果として、この事業に関わった生徒達には、「自分が社会を変えられるのであれば、挑戦したい」といった地域の担い手としての意識の高まりが見られたと学校から報告を受けております。また、3年間を振り返れば、指定初年度がちょうど新型コロナウイルス感染症の影響による全国一斉の臨時休校と重なり、その後もコロナ禍によって計画通りに事業が進展しない時期もございましたが、コンソーシアムを構成する各機関の多大なる御協力と金足農業高校の先生方のこの事業にかける熱意により、事業の全体目標である「本県にとっての最重要課題である人口減少に対応しつつ、農業関連産業を変革することのできる人材育成に向けた教育課程の開発」について、一定の成果があったものと捉えております。しかし、全てがうまくいったということではなく、改善を要する点もございます。金足農業高校における指定事業としては、今年度が一つの区切りとなりますが、地域との協働による教育活動の充実は、今後も本県高等学校教育にとって重要であることに変わりはありません。委員の皆様方におかれましては、本日の委員会において、金足農業高校の成果をいかに他校に普及させるか等も含めて、専門的見地から忌憚のない御意見、御提言をお願いいたします。本日は、よろしく願いたします。

実施校あいさつ 校長あいさつ（松田 聡）

本日はお忙しい中、運営指導委員の皆様方そして県教育委員会の皆様方にお越しいただきありがとうございます。また、本事業についてこれまでたくさんのご指導、ご助言いただきましたことに感謝申し上げます。さて、本事業は今年度で最終年を迎えております。この事業が始まる前は、私は教頭でございましたけれども、教室や実習棟あるいは学校農場といった、いわゆる学校の敷地内という限られた空間・環境で学び、そしてクラスですね、外部講師を招いての講習会、あるいはこちらから出向いての現場見学・研修などある程度行ってきました。ただ、この事業に取り組んでからは、これまで以上に多様な経験を持つ方々の講演を受けたり、現場に出たりする機会が格段に増えました。その結果、書物や本校教師からの話・情報のみならず、いわゆる「本物」を見たり体験したりする機会が増えました。このように学校では学べないことを生徒たちは目を輝かせて学んでいます。学校にも様々な教育資源や教材

があるといえはありますが、教育で重要なのは何といっても人的資源だろうと思います。様々な経験を持つ人と出会って、話を聞いて、本物を見て、生徒が後の職業選択に生かし、どうしたらより豊かな人生を歩めるのかということを考える良いきっかけとなりました。さらに本事業を通じて、生徒の意識が変わっていく、いわゆる生徒の変容が見られたということも大きな特徴かと思えます。具体的には、後ほど担当から説明があると思います。今後は本事業が終了して全て終わりということではなくて、本事業の遺産・財産を引き継ぎ、学校として独自で何ができるのか、そういうことを考えていく必要があります。本日の協議会での皆様方からのご指導、ご助言をいただき、これまでの実施から得られた効果を生かす形で、学校で自走できるように取り組んで参りたいと思います。色々なお知恵を拝借することになりますけれども、本日はどうかよろしくお願ひいたします。

運営指導委員長あいさつ（岡田 秀二）

運営指導委員長としての挨拶ということでもいただきましたけれども、この会議での発言もそうですし、むしろ運営指導の先生方に申し訳ないのですが、我々運営指導に指名をいただいて大変ありがたく思っていますが、むしろ、生徒からあるいは金農の皆さんから勉強することが大変多かったというふうに思っています。それは今、校長先生がおっしゃったように、我々どうしても政治の世界も政策をつくる官僚も、それから県のご指導される皆さんも、あるいは大学の教員もそうですけど、動もすると抽象度の高いところに辿り着きながら、いわば批判的なところを整理するというのが学問であったり、その立場から教えることが大事なんだみたいな、そういうことが、これまでの我が国のいわば教育制度の在り様だったと思います。

しかし、校長先生おっしゃるように生徒も変わる、社会も変わる、地域も変わってといった変わることが前提ということになりますと、最も最先端は、その変わっていることを常に意識しながらそこで工夫をしているという、そこが一番だと思います。運営指導委員としては、そういう中で整理をしながら、我々としてはこういう整理ができていますというね、そういう意味では、現場と高校と生徒と我々指導員が集まっている皆さんのそこでのコミュニケーションと、それぞれが抱えたり問題意識として持っていること、あるいはこれを乗り越えないといけないねという合意ができたことを一緒になってあたっていくという、この姿勢が全ての分野、全てのテーマに関わって重要だと思っています。そのような意味では、運営指導委員長だからどうっていう、そういう意識は全くなく、今日勉強したことを大学に帰ってどうやって生かそうか、そういう発想で常におりますので、運営委員の立場というよりは、ある整理をするそういう角度から見たらこう思いますというような、そういう議論を率直にしていくことがこういう会議を設けていただいた、これがたぶん最大の意義だと思いますので、遠慮なく意見をぶつけていただいて、議論の末、1つでも何かやっぱり合意できるなということを得てみたいなどこのように思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

質疑応答及び意見交換、運営指導委員による指導助言

運営指導委員（細川 和仁）：

たくさん申し上げたいことはあるのですが、1つは今岡田先生がおっしゃっていただいたように、小中高の学習指導要領でいうところの総合的な学習の時間、探究の時間で考えると、探究的な学びというところでは、金農の取り組みというのはすごく意義が大きいのではないかと感じています。それは、生徒さん個人の中の探究の学びだけではなくて、それがカリキュラムになって、そしてこういうのが大事だということが先生たちに共有されて、1つの金農メンタリティというか、そういうのが価値として芽生えつつあるような感じが伺えて、それがすごく素敵だなというふうに感じました。それが組織文化として根付いていくということになると、照内先生がおっしゃっていただいたような、校務分掌として組織の協働体制としてどう形にするかということがその表れになるのかなと思いますので、そこが鍵だろうなというふうに思います。

運営指導委員（藤 晋一）：

午前中の発表も非常に楽しく拝見しました。先程照内先生のグラフでもありましたが、ほとんど最後の方で非農家出身の割合がすごく高いという中で、この事業というのがやはり、昔であれば農業高校というのは農家の子どもさんが来るということで、親から農業というものを学ぶことができたと思うのですが、今だと実際に学ぶことのチャンスがないという中で、こういう創生論だとか、実際に農家の方々と付き合うことによって、そこで農業というものの実際を知ることができたり、新しいドローンだとかICTだとか、

そういうことを学んだりだとか、実際に普段スーパーに行っても気が付かないような農産物の廃棄だとか、そういうのに着目して、それぞれの学科の中でそういうことができたことが非常に実践的なこととしてすごく大きいのだろうなど。それが生徒さんの成長に繋がったのだろうなどと思っています。先生方の中でどれぐらいモチベーションが上がったとか、色々なグラフがありましたが、先生方でさえ改革力とか創造力とかその辺のところという話をしていましたけれども、実際に大学生を見ていると、この頃本当に思考力とか実践力とか、そういうところが落ちてきているという印象を私たちは受けている中で、ここが上がっているだけで僕はすごく十分なんじゃないか。コンピューターゲームをいじったりして生活している子が非常に多い中で、自分で色々なことを考えて、実践していく能力がついたというのは、他の高校の生徒さんに比べれば、かなり良いことだと僕は感じています。その表れが、実際には私たちの大学では、3年前から総合型選抜をやっている中で、プレゼンテーションをやっていたのですが、あまり詳しくは言えないのですが、金農生の能力というのはものすごく高いです。特にプレゼン能力がすごく高いですし、それに対する回答、自分たちが何をやってきたという回答力が、普通高校含め他校に比べて、それが高い。これだけこのような事業をやってきた中で、そこに自分たちが自ら関わって、実践的にやっているの、頭で覚えているというよりは、体で覚えているってということが、すごく良いことだと感じています。また、話は変わりますが、事業の開始当初、横断的なこともやってくださいと言ったのが、この最後の年にかなり実践的にやられているのがすごく素晴らしいと思っているところです。特に今後、生徒さんたちが、高校のゴールとしてはどんなところに就職したか、専門性を生かしたところに進学あるいは就職したか、起業できればもっと素晴らしいが、そういったところの追跡調査なんかは課題が終わってからも続けていただければと思っています。大学に行った子たちはその後どこかに就職するので、そのあたりの追跡調査とか、あるいは就職後も数年でやめてしまう子もいるので、そのあたりも追跡調査ができれば、今後の発展に繋がるのかなと思っています。それから、先程照内先生の中でもありましたけれども、転勤していくので、ぜひ転勤したところで他の高校にいったところでこの金足農業で学んだ先生方の地域をその高校で展開していただければ。今オール金農ですけれども、オール秋田の方向で、高い教育力を。小中の教育力が高い県ですから、単純に進学力ということではなくて、実践的な生徒さんを世に出すかということだと思いますので、ぜひこれからも頑張ってくださいと思います。最後に、予算がなくなるという話でしたけれども、県立大学とは協定を結んでいますので、ぜひお気軽にお声がけいただければと思いますし、できれば希望としては、今までは先生が講師として来るということでしたけれども、学生との交流というのもぜひ、今後考えていただければ嬉しいかなと思います。3年間非常に楽しく見させていただきました。最終の取りまとめも楽しみにしております。

運営指導委員（藤村 幸司朗）：

全体を通しての感想としましては、農林業の次世代人材の育成、この点に関しては、現場で実際に農業をやられたり、林業に携わったりということも含めて、それから進学した後で指導者としての活躍ということも期待できるということで、私共としては本当に感謝申し上げたいと思います。県としても力を入れているものが、まさにこの次世代人材をどうやって育てていこうかということが一番の課題でありますので、それを実践していただいて、そういった意向調査なども踏まえて、きちんとこの後のところまでフォローしていけるということも考えると非常に有難い、貴重な取り組みだなというふうに感想を持ちました。いくつかこの表の中からお話ししたいのですが、GKHが4から5ポイントの層が一旦下がったというところで、最終年度には期待通り上がって、もとの復活したというところがですね、やはり意識の高さからくるところがかなり多いというふうに捉えさせていただきました。それから、先生が身に付いた力と身に付けてほしい力の比較をしている面については、少し欲張りになっている気がします。マネジメント力などというのはですね、なかなか高校の段階からマネジメント力がつかないといわれると、私共も今苦労しているような状態でございますので、大変期待度が高い分ですね、そういったところが数値として出たのかなというふうに捉えさせていただきました。あと、予算面のお話しでございます。農業教育高度化事業につきましては、来年度予算につきましても、現在予算要求の最中でございまして、なんとか増額できる方向で頑張るって財政と折衝中でございまして、今回もスマート農業の連携のお話もしていただきましたので、そういった学業だけではなくて、実際の最先端の現場もまた見ていただいているところで、初めて学んだものが実際の自分の感覚として身に付くといういいですか、理論だけではないものが身に付いてくるのだろうというふうに思っていますので、こういった予算獲得についても、県を挙げてなんとか応援していくという体制をとっていきたいと思っていますので、ご報告がてら、頑張る決意表明ですね。以上でございます。

運営指導委員（齋藤 了）：

私は、県庁を退職してこの現場にきて2ヵ年、この事業に携わらせていただきました。どうもお世話になりました。ありがとうございました。まずはですね、昨年もそう思ったのですが、今日の午前中の発表を聞かせていただいて、非常に素晴らしい内容で、色々感激しました。岡田委員長からもあったように、かえって学ばせてもらったような感じでございます。そういう点では、その指導にあられた先生方に対してですね、非常に難儀されただろうということで、敬意を表したいを思います。今各科の先生方からこの事業の報告がありましたけれども、その生き生きとした発表を聞いておますと、まさに生徒方を間近で見ている先生方が、生徒たちの変わり方を見てですね、この事業をやって良かったなという、本当に実感しているということが伝わってきました。それについても敬意を表したいと思います。まず、この事業の目的である、農業関連産業を変革することのできる人材の育成という、変革ができなくても、今回の結果を見れば、地域に住んで働きたいとか、地域の役に立ちたいとか、そういう気持ちがすごく高まってきたということは、変革する、しないは別として、まずは非常にそれだけですごい成果なのではないかというふうに感じます。2つ目の地域産業を担う人材。農家出身の方でない人がかなりいるとなると、なかなか地域農業を担うというだけではなくて、地域農業を担う人もいれば、担わなくても応援する人もいる。そういう応援する人材の育成というのも1つの視点としてはあるのだと思います。まずは困難といえますか、課題解決のプロジェクトのような活動は、金農では毎年やっているのかもしれませんが、この事業に取り組んだことで地域を知って、地域の魅力を知る、それが結果的に地域に残りたいというそういう気持ちが芽生えたり、さらにはもっと勉強したいという思う気持ちが育まれたりするということは、ものすごく大切なことでして、それが今回のこの事業の成果として良かったというふうに思います。先程、大学に行ってから、こちらに帰ってきてやりたいという人も多くなったという話もありました。そこが私としては大事なところだと思います。私も県外の大学に行くときは、自分で帰ってこようという気持ちはさらさらなくて、親から帰ってくるのだったら行ってもいいよというようなことを言われました。そういう感じでした。それから、今日の先生方の報告を聞いて、帰ってきたいというふうに思っていくのと、そうでないとは全然違うので、まずは地域を知って地域の魅力を全部でなくとも気持ちのどこかに刻まれた状態で、そういうことが生まれるということですので、そういった活動を続けていただきたいというふうに思います。この事業がなくなれば、来年度から時間割を割いてのこういった事業はなかなかできなくなるのかもしれませんが、予算のこともあるでしょうが、色々なやり方を考えて、こういう地域を知る活動というのは、1つの流れの中で仕組みとして根付かせていってもらいたいというふうに思います。その方法は、色々やり方はあるかと思いますが、それは教育委員会の方とも相談していただいて、これはここだけではなくて、秋田の魅力、もっと地域の魅力を何らかの形で作っていくというのが、重要だということがここで証明された訳ですので、そういう形で広めていっていただければ、人口減少に少しでも役に立つのかなと思いますので、そこらへんもぜひご検討いただきたいと思います。予算はなくとも、ゼロ予算でできる、人との繋がりを考えればゼロ予算でもできることもあるでしょう。例えば農業ですと、農業法人協会ですとか、農業士会ですとか、そういうところとの連携もできるでしょうし、昔は地域振興局の方で農業高校との連携事業を盛んにやっていたころもありましたので、そういうところに力を入れながら、藤村部長にも予算をとっていただきながら、何とかやっていく方法を考えていただければ良いかなというふうに思います。本当に勉強になりました。ありがとうございました。

運営指導委員（椎川 浩）：

今年度からの参加で2回目ということで、大変恐縮ではございますが、生徒さんからの発表も踏まえまして、大変素晴らしい内容でした。敬意を表したいと思います。内容を見ますと、私たちが事業化しなければならぬという、大変ヒントになる発表でした。特に農家の所得を考えますと、フリーズドライとか、もしくは発酵とかそういうところも非常に重要な部分だと思います。大変ヒントになりました。実践しなければならぬと思いました。今後も継続をお願いしていきたいです。やはり目的としては、地元で定住していただいて、そして就職に繋げていただきたいです。県民に食で貢献するということの1つの視点として、生徒さんを見ていただきたいというふうに思います。

貢献するためには、体験とか実践とかそういうところが必要になってくると思いますので、我々も流通研修を毎年行っております。今年はスマート農業の実践体験ということで、金農さんは色々な事業で中止になりましたが、秋田北鷹高校さんとかでの実施などありますので、そういう体験などの機会を提供するというところで予算の方は県の方から頑張ってください、またそういう機会をとっております。質問といいますが、私の決意表明でございます。よろしくをお願いします。

運営指導委員長あいさつ（岡田 秀二）

指導委員の先生方からの的を得た良いご指摘をたくさんいただきました。総括的には、藤先生が全体像についてご指摘をいただいたと思います。当初の目的、すなわち人口減少にどう対応するか、対応したこれからの農業、あるいは高校・高等教育ということだったのですが、私の印象は、秋田の人口減少こわくない、金農があればこわくない、そういう印象を大変強く持ちました。私のお話しも十分にできませんでしたが、持続可能性というキーワード、これのもともとのところは、やはり環境と経済の両立だとか、どちらか大切かというようなことで、いわゆるESD（持続可能な開発のための教育）と持続可能な開発、あるいは持続可能な発展というそういう言葉も使っていて、この発展については要注意だなと思いつけています。というのは、どうしても物の大きさ、あるいは勢いとしてのもっともっとみたいな、あるいは進化するみたいな、成長するみたいな、イメージの発展がどうしても近いなと思いつけていますが、あえてここでは発展という言葉を使いつつ、これまでの発展にはない発展、すなわち人間と協働の発展、これをやはりこの金農が具体的な形ではこうなるよと、こういうことを発展というのだということですね、この3年間で示していただいたなということ強く思いました。実は時代を捉えるキーワードの1つはイノベーションという、そういう言葉です。それは、シュンペーターという経済学者が最初に言っていますが、本来的なイノベーションは色んなところで色んな人がいわば既存の体制・組織・論理を破壊することによって出てくるのだとそういうことです。すなわち、人口減少に追いやったその論理と方法論をここで破壊をして、人口減少だけでも新しい発展をこの金農を中心に秋田が遂げていくと、こういうことができると日本のいわばこの雛形っていうか、エリートに十分になりうると、こういうことを強く感じました。本当に素晴らしいです。生徒の変わり様もそうですけれど、先生方の変わり様についても私は感激しています。3年前、今のような話はほとんど出ませんでした。大変私は心配していました。だけど見事にそれを払拭してくれました。本当に素晴らしい。この金農がそっくり大学の名前を付けても全然恥ずかしくないですね。それぐらいの我が国が今ほしい人材をつくりつつあるとそう思います。今日は本当にありがとうございました。

研究開発主任あいさつ（照内 之尋）

委員の皆様方から指導助言を含め激励のお言葉をいただきまして、本当にありがとうございました。ただその一方で、やはりまだまだ課題も多くて、例えばせっかくこうやって取り組んできたものを、適切に情報発信がきちんとできていたかと言われると、やはりそういったところでもまだ弱かったところもありますし、学校のHP等も含めてもう少し情報発信をできればと反省しています。また、齋藤理事長様からもお話あったように、この仕組みをきちんと組織化していくことが大切だと考えております。3年間ご協力いただきまして、本当にありがとうございました。

実施校あいさつ 校長あいさつ（松田 聡）

本日はありがとうございました。照内教諭の発表の中で、地元の行事に参加したこと、あるいはボランティアに参加したことの数値が低いという結果が出ていました。これを伸ばすためにやはり原因を探らなければいけないだろうなと思っております。本校は入学したときに、全員部活動参加というスタンスでいます。文化部であれ、運動部であれ、全員が100%加入する。もちろん時間が経過するとやめたりする生徒もいるのですが、3年生になってもかなり高い割合で部活動の活動をしています。そうすると土日なんかは、時間的に余裕があるかという、ちょっと厳しいかなというふうに考えております。ただし、ボランティアという意味では地域貢献に非常に大事な行事でありますので、3年生が就職決まった、あるいは進学決まったと、3年生は進学といっても推薦とか特色入試で合格する生徒がほとんどですので、1月、2月、3月あたりは受験とは関係ない生徒がほとんどですので、冬の除雪ボランティア等積極的に参加するように推奨していきたいと考えております。また、先生方のお話しで大学生の様子も伺いましたが、本校の生徒でも大学に進学する生徒が多いのですが、希望ではありますが、そういった生徒が大学に行って、地域のことをもっと考えないかというような、けん引するようなそういう存在になってほしいなと思います。秋田県のみならず、色々な地方の大学に行くのですが、この地方のこの土地の課題って何だろうって考えてみないか、そういった問いかけをして、波及効果が全国に広がれば良いなというふうに考えております。地域との協働の事業は今年で終わりということになりますが、これで終わりということではなく、最初にお話ししましたが、学校でどうやったら自走できるのかということに関して分掌をきちんと構築・組織化し、そういった組織的な対応が必要かなと考えております。委員の先生方にはこれでさよならではなくて、これからの情報交換を通じていただければ非常に嬉しいなと思います。今後ともご指導のほどよろしくお願いたします。本当に3年間どうもありがとうございました。

金足農高・造園緑地科3年生

高齢者宅の樹木剪定

学んだ技能で奉仕活動

秋田市の金足農業高校(松田)は、493人の造園緑地科の3年生12人が、地域の高齢者宅を訪れ、樹木の剪定や庭の草刈りなどの奉仕活動を行った。

生徒たちがチームを組んで調査や研究に取り組む「課題研究」の一環。地域の1人暮らしの高齢者宅を訪れ交流する



低木を丸く刈り込む造園緑地科の生徒

るとともに、学んだ技能を生かす狙い。

学校近くに住む男性宅を訪れ、造園緑地科の12人が樹木の剪定を行うグループ、草刈りを行うグループに分かれて作業した。

剪定グループの8人は電動刈り込み機やはさみを使用し、低木を中心に刈り込んだ。指導教員らから「少し離れて全体のバランスを見ながら刈ってみて」などとアドバイスを受けながら、庭木の表面をきれいに丸く仕上げた。

三村美咲さん(17)は「角が立たないように、はさみを小刻みに動かすことを心がけた」と話した。

草刈りを担当するグループ

秋田市出身の競泳元五輪代表でスポーツコンサルタントの長崎孝子さんが指導する水泳教室「長崎孝子のSWIM TO SMILE」が、30、31日に同市新屋町の県立総合ホールで開かれる。県と県総合会社の主催。30日は午後2時から3歳～6歳の未就学児と保護者を対象にした「幼児の

は、教員から電動草刈り機の手操作方法について説明を受け、目を保護するゴーグルを着用して作業を開始。慎重に機械を操作していた。

野球部員の沢木竜誠さん(18)は「部活動では地域の方に応援してもらったので、その恩返しができれば」と語った。

家主の男性は入院中で、市内で別に暮らす次女(17)が作業を見守った。次女は「父の家に来ると家事の手伝いで1日が終わってしまい、庭の手入れはなかなかできなかった。お盆を迎える前にきれいにしてもらえてうれしい」と述べた。

(天谷好恵)

秋田市出身、元五輪代表

長崎宏子さんから親子で水泳学ぼう

親子水泳教室
3時10分～3歳未満
1アクト
日には
午前11時

秋田市 県央

社会部

TEL 018-8888-1830
FAX 018-8233-1780

男鹿梨コンポート完成

先輩考案のレシピを基に...

秋田市の金足農業高校生活科学科の生徒たちが、男鹿産のナシを甘く煮た「男鹿梨のコンポート」の瓶詰を開発した。卒業生が考案したレシピを基に後輩たちが製品化。23日の学校祭「金農祭」で来場者に販売する。

金足農高・3年生5人

コンポートは、今春卒業した杉本千尋さん(19)が1年時に考案。ヨーグルトムースと組み合わせたものは、2019年の「牛乳・乳製品利用料理コンクール県大会」で最優秀賞を受賞した。

杉本さんのコンポートのレシピを踏襲し、1学年後輩で3年の川井薫乃さん(17)、三浦結衣さん(17)、佐藤杏美さん(17)、萩原日彩さん(18)、宮田亜希菜さん(18)が研究を重ねた。

3年の5人は、地元で愛される男鹿産ナシのおいしさを多くの人に知ってもらおうと製品化に着手。調べるうちに、

流通規格に合わないものは廃棄されることもあると知り、農家から規格外品を購入することにした。学校近隣の菓子店のパティシエからアドバイスをもらったり、県内の加工会社を見学したりして、試作を続けた。

材料にこだわり、フルーツシユガー、蜂蜜、有機栽培レモンの果汁を使用。ナシのまろやかな口当たりを生かし、自然な甘みに仕上げた。ナシの品種によって煮詰める時間を変えるなど試行錯誤の連続で、調理には生活科学科の仲間たちも協力してくれた。

5人は一街で売られている

23日の学校祭、瓶詰販売



「男鹿梨のコンポート」を完成させた生徒たち

加工品が、どれほど苦勞を重ねて製品化されたかよく分かった」と振り返る。「秋田には、地元の人も知らないようなおいしい食べ物があふれている。コンポートをきっかけに、秋田の豊かさに気付いてもらいたい」と話した。

杉本さんもう5人の成果を喜び、「今後さらに下の代の後輩たちが、食品加工に懸ける思いを引き継いでくれたら」と期待を込める。

23日の「金農祭」では午前9時半から販売する。250個限定で、500円。

(小山田竜士)

令和4年10月21日 秋田さきがけ

廃材変身 クリスマス彩る

金農高でワークシヨップ

児童らとキャンドルに

廃材を使ったアレンジメントの保護者ら計31人が参加して制作のワークシヨップが、23日に開催。金足農高の見本秋田市の金足農業高校が開く園で飾り付けの材料を探した。造園緑地科の3年生14人が講師を務め、親子連れとクリスマス用のキャンドルアレンジメントを作った。

「近隣のコンビニなどがない地域の住民はカードへのチャージ入金ができず、バスの利用が難しくなる。少人数でも利用できる。事業の目的として要綱で定める『高齢者の社会参加と生きがいへの促進』に反する」として、現金の支払いを継続するよう訴えた。

陳情は「ほかの物価騰騰の影響を受けた世帯への幅広い支援」2015年の国庫補助に「納期限」7日「改め」を求めた。

(田代幸徳)



アレンジメントの飾り付けをする参加者



参加者は生徒と一緒に本園を歩き回り、材料を探した

「接合剤で貼り付ける作業が大変だったけれど、楽しかった。部屋に飾って、クリスマスには明かりをつけたい」と笑顔を見せた。

亀井さんのいとこで、制作を手伝った金足農高3年鈴木風さん(18)は「普段は外で遊ぶことが少ないが、今日は一緒に楽しむことができた」と話した。

金足農高は、持続可能な開発目標SDG5について考える機会として、昨年度からワークシヨップを開催している。

(佐浜幸徳)

秋田市広報

▼きりしまかん土師図書館は12月6日(火)から2月10日(金)まで、工事のため入館できません。期間中は臨時カウンターで予約した本の貸し出し・返却など一部のサービスのみ実施します。詳しくはお問い合わせください。

☎045・045・2222

(きりしまかん土師図書館)

令和4年11月29日 秋田さきがけ

さきがけ

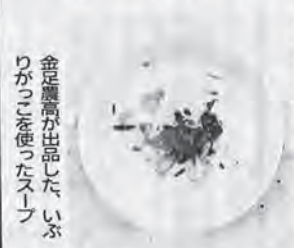
(第3種郵便物認可)

東洋水産 商品アイデアコンテスト 金足農のスープ準V



準優勝に輝いた(左から)鎌田紗季さん、鎌田あいなさん、仲野谷さん

いぶりがっこ使用/クリーミーな味に



金足農高が出品した「いぶりがっこを使ったスープ」

(田村瑞子)

東洋水産(東京)が東北の高校生を対象に開催した商品アイデアコンテスト「スマイルアッププロジェクト」東北2022で、秋田市の金足農業高校がいぶりがっこを使い「クリーミー」に仕上げたスープを出品し、準優勝に輝いた。

フリースタイルを想定したスープを考案するコンテストで、金足農高からは、1年生3人が出場した。出品したのは「じっばり」。

8月下旬以降、試作を重ねた。小麦粉を米粉に替えたり、チーズやみそを加えたりして調整し、レシピを完成させた。

決勝大会は11月26日に仙台で行われた。地元ならではの食材が使用されている。

鎌田紗季さんは「発表は緊張したが出場できてよかった」と話し、仲野谷さんは「達成感があり、いい経験になった」と述べた。鎌田あいなさんは「食は人をつなげるのだと感じた。来年も挑戦したい」と語った。

コンテストは、カップ麺の製造販売を手がける東洋水産が、食に関心のある高校生に日頃の学びの成果を發揮してもらおうと2015年から開催している。

令和4年12月22日 秋田さきがけ

本研究実施報告書は、令和2年度文部科学省指定「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」の研究成果をまとめたものであり、秋田県教育委員会、秋田県立金足農業高等学校が文部科学省より委託を受け、実施したものです。

したがって、本研究実施報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要となります。取扱についてはご留意願います。

